

回向の心行

- 一、論主の一心と鸞師の註解
- 二、無礙の光益
- 三、惑智無礙
- 四、罪徳無礙
- 五、罪徳一味
- 六、惑智一味
- 七、畢竟成仏の道路

一、論主の一心と鸞師の註解

「論主の一心とけるをば 曇鸞大師のみことには
煩惱成就のわれらが 他力の信とのべたまふ」

回向の心行

「回向の心行」を讃嘆せられる和讃、この和讃から以下は如来が我等衆生に回向して下さる心行についての讃嘆であります。この和讃より前に、すでに、

「弥陀の回向成就して 往相還相ふたつなり

これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ」

と言うのが出ております。如来の回向が衆生の上には何となつて現われるか、往相と還相とがそれであります。往相とは此岸より彼岸への歩みであり、還相とは彼岸の浄土から生死の現実へのはたらきかけであります。この往相と還相と二つを一念に衆生の上に回向せられて、我等の上には、一心の信心、安心が与えられるのであります。念仏に生きるものは、往相の歩みを成就するのであつて、還相摂化の相をとつたり、衆生済度の意識を持つたりするものではありませんが、しかし果実が芽を切つて二葉を出した時、その二葉の中には、因も果も、やがての日の大樹大木も、花も実も、内在しているのであります。それでないと二葉は生きた二葉ではないのであります。そこで「弥陀の回向成就して 往相還相ふたつなり これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ」と、仰せられたのであります。

心行とは、どういうことか。

「心」とは一心、即ち安心であります。信心であります。「行」とは五念行のことです。五念行とは、礼拝、讃嘆、作願、観察、回向の五門行のことです。礼拝門とは身に礼拝することであります。しかし、ただ体に礼拝するだけでなく、一心に如来に帰命することであります。礼拝は一心帰命の心が相に出たのであります。讃嘆門とは真実に尽十方無礙光如来の名を称することであります。称名することは如来を讃嘆することなのであります。一心帰命が口業に現われて讃嘆門となります。

この礼拝、讃嘆はそれに止らず、願生安樂国と、彼岸へむかつて純なる願生の旅に出発するのであります。やがて浄土に至って、浄土の莊嚴を観察して、悟りを成就し、ついに生死に還相摂化の大用をおこすのであります。それが觀察門、回向門であります。

この五念行は一心帰命の安心において現われて来る生活でありますから、心行と云われるのであります。この心行こそそのまま如来の回向であります。「弥陀の回向成就して 往相還相ふたつなり これらの回向によりてこそ 心行ともにえしむなれ。」しかし、これらの回向は要するに南無阿彌陀仏の回向であります。名号こそは、往相還相一切の徳の円成せられ、五念五果の大善の円融せる功德宝海であります。如来は眞実功德相そのものであるところの名号を一念に回向せられる、この名号を衆生の機に領受した相こそ、心行であります。この心行によつて、我等は往相の果を得るのであります。

一心相承

以上の「回向の心行」は、心と行、即ち他力信心、如実修行とに別けて味わうことが出来ますが、先ず他力信心について讃嘆せられます。初めに出した和讃「論主の一心ととけるをば 曇鸞大師のみことには 煩惱成就のわれらが 他力の信とのべたまふ。」これは天親菩薩が「世尊我一心帰命」と讃えられた、その一心について述べられたものであります。

この和讃の題についてであります。先哲の中には、「一心の相承を明す」と題せられた方があります。論主が世尊我一心と仰せられたことは、後の日、三国を通じて大変な問題となり、ついに我が聖人に至つて、「一心の華文」と絶讃せられ、やがて信巻には

「問ふ、如来の本願已に至心・信樂・欲生の誓を発したまえり、何を以ての故に論主一心と言ふや。答ふ。愚鈍の衆生をして解了し易から令めんが為に。弥陀如来三心を発したまふと雖も、涅槃の眞因は唯信心を以てす。是の故に論主三を合して一心と為せるか。」

と断定せられたのであります。誠に、この「論主の一心」こそは、論主が正しく、世尊の教え、即ち仏教と相応し相承せられたものであり、今その論主の言を鸞師が、そして次第に相承して聖人に至り、ついに我等の一心となるのであります。

仏教においては、この伝統相承、血脈相承、師資相承ということが、最も大切なこととして尊重せられるのであります。師とは師匠、資とは弟子のことです。資とは、たすけるという字ですが、師は教え、弟子は教えを受けて師を資けるが故であります。しかし必ずしも、面授口伝とて、面（まのあた）り、くちづから教えを受けねばならぬことはないのです。七高僧の中でも、面授口伝によつて師資相承した方は、善導大師が道綽禪師から、親鸞聖人が法然上人から、この二人しかありません。あとは皆、その著書によられたのであります。けれども、教えを承けつがれたことには間違いはないのであります。必ず血脈相承とて血がつづいていなければならぬのであります。文化というものは、伝統、即ち歴史の上を流れるものであります。この伝

統相承を無視したことは、どんなに賢いようでも駄目であります。私どもになつてはじめて法界に相を現わすようなもの、そんなものは幻であります。

唯一絶対の不行、南無阿彌陀仏は、久遠の古より常住不変に現行して、一つの流れを大地の上に成就して来ました。その「一河の流れ」にむかつて帰入すること、それが必ずなされねば、真に不行南無阿彌陀仏と一体になることは出来ないであります。一個人のものであれば、それがどんなに美しく見えても真のものではないのであります。ですから聖人は念仏正信偈の最後において、「唯可信斯高僧説」、ただこの高僧の説を信ずべし、と仰せられました。そしてその前に、世尊から三國にかけて七高僧、そしてその教え、しかも伝統相承された一貫の説を出されました。

七高僧は、しかし決してただその前に出たお方の説を模倣したり、オウム返しされたのでなく、それぞれの時代を代表して教えを承け、自己のものとし、真にそれに生きて、伝統を乱さずして、それぞれの宗の真意義を發揮し顕彰されたのであります。

曇鸞大師も亦、その重要な役割を成就せられたのであります。龍樹、天親とインドに於ける大黒柱、その二菩薩の真生命たる浄土門、念仏の巨流は今、鸞師の上に流れて来たのであります。鸞師の言々句句は、二菩薩を活かすか殺すかの鍵であると共に、後に出ずるものの全体を左右する重要尊重の金字塔であります。ですから、聖人は「天親菩薩のみことをも 鸞師ときのべたまはずば 他力広大威徳の 心行いかでかさ」とらまし」と讃えられました。

そこで、天親の世尊我一心の一心について、「論主の一心ととけるをば」、鸞師は如何に相承し解釈せられたか。それに答えて「曇鸞大師のみことには 煩惱成就のわれらが、他力の信とのべたまふ。」と仰せられました。しかればその真意は如何でありましょうか。

問題

天親菩薩は『浄土論』の最初に於いて、世尊我一心と、その領解の安心をお述べになりました。これ全く天親菩薩の領解の告白でありまして、菩薩自らが、無礙光如来を念じて、浄土に願生せられ、その一心が心心相統して、微塵の疑いや余念の雑らなことを示されたのであります。

この一心について、曇鸞大師は「言ふところは、無礙光如来を念じ、安樂に生ぜん」と願ず、心心相統して他相間雑無し。」と解釈せられました。これ一心、即ち信心は、停滞した心の状態でなくして、心心相統して願生の進趣をとげるものであることを示されたのであります。

しかるに、ここに一つの問題があります。それは、「世尊よ、我は一心に」と仰せられた天親菩薩は、世にいわゆる、十向満位（菩薩五十一位中の第四十位）の聖者であります。そこでこの一心と言われた安心、信心は、尊い菩薩だから与えられたのか、それとも一切衆生にも与えられるのか、下根の劣機も論主と共に往生し得るや否や、という問題であります。

普共諸衆生

この問題を解くに当って、先ず最初に曇鸞大師によつて注意された問題は、願生偈の最初が「世尊我一心」と始められ、願生偈の最後が「普共諸衆生、往生安樂国」で終つておりますが、その天親が「諸の衆生と共に」と言われる「衆生」とは如何なる機類の衆生であるか、という問題であります。

願生偈を釈せられる下の長行には、何時も「善男子善女人」とあり、又、「菩薩摩訶薩」とあります。しかれば「普く共に」と共せられる衆生は上品の衆生であつて、凡夫に非ずとすべきでありましようか。

ここに於いて、曇鸞大師は『論註』に於て、
「問うて曰く、天親菩薩回向章の中に、普く諸の衆生と共に安樂国に往生せんとのたまえるは、此れ何等の衆生を共にと指したまうや。」

と問題を起されました。そしてそれに対して、『大無量寿経』の十七願及び十八願成就文を引いて「これを案じて云わく、一切の外凡夫の人、みな往生を得ん。」と言ひ、それから『觀経』の下品下生の文を引いて、下品下生の人が、五逆十惡の重罪を造り、その臨終に善知識に値ひ、為に妙法を聞き、念仏せしめられて、称名の功德によつて念々に生死八十億劫の重罪を滅し、極樂世界の華中に生れることを得るを示され、

「この経をもつて讚するに、明に知んぬ。下品の凡夫、ただ正法を誹謗せざれば、信仏の因縁をして皆往生を得しむ。」

と結ばれました。これによつて天親論主の真意は、一切衆生と共に往生を願われたのであり、下品の劣機を「共に」と仰せられたのであることが明らかになつたわけであります。今、聖人はこの意をとつて、この和讃に「論主の一心ととけるをば 曇鸞大師のみことには 煩惱成就のわれらが、他力の信とのべたまう。」と仰せられたのであります。

一心即他力の信

天親菩薩が「一心」と仰せられた告白、それには「普く諸の衆生と共に」とのみ言はあつても、我等がこれを頂いたのでは唯そのままに見て過ぎることだと思ひます。しかるに曇鸞大師は、そこに「衆生とは」と問題を提出して、論主の真意は一切衆生、特に下下の悪人凡夫と共に往生せんと願じられたことだ、と明らかにして下さつたことは、曇鸞大師の大慈悲であります。唯に天親論主の真意を明らかにして下さつたのみならず、弥陀の本願の真実、一切衆生一人をも残さず救いたまう大悲本願の真実を明らかにして下さつたのであります。そして天親菩薩の告白たる一心も、それは決して、十向満位の菩薩の個人のお利口から生れた心ではなくて、全く機の善悪にかかわらず回向したまう、他力の信心であることを示して下さつたのであります。

衆生は一心でなければ救われぬ。しかし一心は煩惱成就の心ではありません。煩惱によつて生れたものは一心ではない。しかも一切衆生は救われねばならない。もし天親の一心が菩薩の尊さ故に生れた自力の心ならば、我等は『大無量寿経』によつては救われぬ。しかるに、この一心は天親が『大無量寿経』を領解せられることによつて獲得せられた心、言いかえると如来より回向されて発起なされた一心である。かく他力の信心であることが明らかにされたのであります。他力の信であり

ますが故に、たとえ、下劣の凡夫の心中におきた一心であらうとも、天親菩薩の一心と同一であります。でありますから「論主の一心ととけるをば 曇鸞大師のみことは 煩惱成就のわれらが他力の信とのべたまふ」と讃嘆されたのであります。

我等は曇鸞大師の宗教的立場、歴史的立場というものを明らかに知らして頂くことが出来るのであります。もし曇鸞大師の御出現なく、又かくの如き解釈なくして、直ちに天親菩薩の『浄土論』のみにふれたのでは、『浄土論』は非常に難解ではありませんし、たとえその意を知ることが出来たとしても、論主が「一切衆生と共に」と言われるのは、それは菩薩一般の上求菩提、下化衆生の態度だろうくらいで、我等帰命の一心と同じだとは知らないであります。

しかるに曇鸞大師は、この一心を全く如来回向のものとし、この一心には五念行を内具しておると示されました。したがって一心は自然に五念の行儀を相発して来るのであります。こうしたことを言いはじめると難しいことになるからおきますが、とにかく、聖人が和讃に仰せられるやうに「天親菩薩のみことをも 鸞師ときのべたまはずば 他力広大威徳の 心行いかでかさたらまし」一心五念の心行が、他力広大威徳、即ち如来の回向によつて成就するとは知れなかつたであります。

一心について

「一心」は天親菩薩の『浄土論』を一貫する心であります。『浄土論』に説かれた五念門、あるいはその観察門に於いて説かれる浄土の三種莊嚴二十九種、それを因に約せば四十八願、それらは、つまり一心の内容に外なりません。したがって、生死流転の心ではなくて、一心は浄土の心であり、如来本願の回向成就した心であつて、凡夫にせよ、菩薩にせよ、自ら発起した心ではないのであります。一心は、生死海にありつつ浄土へ願生する純一なる心ではありますが、生死流転の心ではなくて、浄土の心であります。

この一心こそは、やがて浄土にあつては柔軟心と言われる心であつて、帰依と大悲をその内容とする心であります。柔軟心は大慈悲によつて生死海に随順し、帰依の心によつて浄土を憶念するのであります。浄土を憶念する徳によつて衆生に随順する浄土の柔軟心は、現実の生死海にあつては一心とよばれるのであります。でありますから一心は限りなく生死界たる現実人生に随順しつつ、浄土の如来に帰命して浄土に願生しようとする心であります。でありますから、この一心は、一面には自ら成仏しようとする願作仏心と言われると共に、衆生につながる度衆生心と言われるのであります。天親章和讃に、

「尽十方の無礙光仏 一心に帰命するをこそ

天親論主のみことには 願作仏心とのべたまえ

願作仏の心はこれ 度衆生のころなり

度衆生の心はこれ 利他眞実の信心なり

と説かれました。これを以て見ても、一心が深く現実人生に根ざした心であることが領解できます。「煩惱成就のわれらが」という現実の我等衆生こそ、一心の白蓮華の開く淤泥であります。でありますから、この和讃は「論主のお説き下さった一心をば、

曇鸞大師のみことばには煩惱成就のわれらと深く信ずる者、その者に他力によって回向された信心である。」と頂くことが出きると思えます。したがって徹頭徹尾、菩薩の十向満位も役立たず、衆生の煩惱成就も碍げられぬ、如来浄土の心、本願力回向の心であります。ですから論主の一心は勝利、凡夫の一心は劣るを許されない心であります。

鸞師の立場

「論主の一心と告白せられた心は、曇大師の言では、煩惱成就の我等が他力の信とべられたのである。」

この御和讃は、もちろん聖人が曇鸞大師を讃嘆されたものである限り、聖人が、唯一首の中に、非常に明らかに、大師の歴史的役割、その立場をつかんで示して下されたものであります。そのことは前にもちよつと述べましたが非常に大切なことでもあります。

由来、浄土教の歴史に於いて、聖人は七高僧をお選びになりましたが、その中、いわゆる上三祖、龍樹、天親、曇鸞の三師は大無量寿経系、下四祖、道綽、善導、源信、法然は観経系の方だと申されて来ましたが、上三祖大経系の中心は何と言つても天親論主であります。天親論主に至つて、浄土教は動かすべからざる論証を樹立したのであります。しかして論主が大無量寿経に立脚せられる限り、大無量寿経が、浄土の因果、如来正覚の始終を明らかにしたものであります。故に、又、如来より衆生に、浄土より生死海への大悲の動きを説き、一切を如来浄土の一色によつて説かれますが故に、そこに開顕せられるものは、皆、真如一実の本願に輝くものばかりであつて、その視野に生きる者は、本仏の智慧光に照し出されたる菩薩摩訶薩、善男子善女人であります。『浄土論』には、全て菩薩、善男子善女人のみが現われて来るのも当然であります。

我等は、まずかかる純粹浄土の風光、その内的因相、即ち莊嚴浄土の因果について、何等の垢なき清浄そのものの真実功德相を説いて下さる方がなくてはならぬことを切実に感ずるものであります。一切衆生の帰依処は涅槃の徳さながらの妙有でなくてはなりません。『論』はそれを顕されたのであります。

しかして、この天親の出現に先駆する者が大乘無上の法を宣説された龍樹であり、天親の後に出て、これを支那の大地に消化すべき使命を担い、天親を祖述し、その奥深い世界を解釈せられたのが我が曇鸞大師であります。でありますから、大師は、大経系の最後に出でて、唯に天親の『往生論』を注釈されたばかりでなく、『論註』の巻頭には、龍樹菩薩の難易二道の教判を承けていられます。即ち大師は、上二祖を承けてこれを集大成せられる立場であつたのであります。それと共に、これから後に出て来られる、道綽、善導等の観経系のお方を生み出して来る先駆をされたのであります。

相承と發揮

大経の宗教は「如来より衆生へ」の世界を簡明せられたものであり、觀経は「衆生より如来へ」の道、衆生は如何に如来に生きるかの世界を説かれたものとせられます。大経は、先に申しましたように、一点の濁りなき清浄真実なる如来浄土の因果を開顯せられたものであるに對し、『觀経』はあくまで大地の多事多難、虚偽輪轉、惡逆業苦のうち立って救いを求める愚痴の代表、韋提希夫人がその中心であります。したがって、觀経系の下四祖はこの三毒の業火にただれた韋提希に同じて、身を卑謙ひげんにおき、『觀無量寿経』の真意を領解し、正雜二行を選択しつつ、念仏一行を専修せられなくてはならないのであります。

でありますから、下四祖は、一切衆生の内的運命たる永劫流轉の真相を、我が自証において発見して、罪惡生死の凡夫、出離の縁無き惑業苦を懐きつつ、到底隨緣雜善によつては救われ難きを決定して、如来本願の名号、大悲選択本願の真意を領解して、大地の救いを明らかにせられるのであります。

曇鸞大師は、上二祖を相承されたばかりでなく、やがて歴史的発展をとげて、下四祖を生み出す、その母体となられたのであります。天親の宗教には惡人だの凡夫だのという文字は見出せない。しかるに、曇鸞大師は、その天親論主の論を註解しつつ、觀経のいわゆる下品下生の惡機の救いを問題とし、その惡逆の救済の能不能を決定せられました。大師の勝れた巨腕が思われます。凡庸の徒であつたならば註釈は註釈に終つたでありましょう。

何故に如来は

やがて、鸞師によつておこつた道綽は、

「……生死に輪回して火宅を出でざるや、答へて曰く、大乘の聖教に依るに、まことに二種の勝法を得て、以つて生死を排せざるに由りてなり。是を以て火宅を出でず。何者か二となす。一には謂く聖道、二には謂く往生浄土なり。その聖道の一種は今時に証し難し。一には大聖を去ること遙遠なるに由る。二には理深く解微なるに由る。」

と聖浄二門の教判を建て、やがて「たとい一形惡を造れども、ただ能く意をかけて專精に常に能く念仏すれば、一切の諸障自然に消除して、定んで往生を得。」と決せられました。その道綽はやがて善導大師に面授口伝して、念仏正定業、五種正行の宗教を大成せしめました。善導に至つて、大地の宗教、一切衆生の救済、救いは、衆生のものとなつたのであります。それがやがて法然上人によつて我が日本国土のものとなりました。法然上人に、往生之業念仏為先の標語を授け、その先驅的役割を果した者が横川の源信和尚でありました。かくしてついに我が聖人に至つて、七祖全てを相承集大成せしめ、大経系、觀経系の一切が、信心正因、称名報恩の教相の中に生きたのであります。

我等はかく歴史の流れをたどることによつて、特に如来回向の大悲、微かながら往相の一道を行步させて頂けば頂くほど、大悲還相摂化、還来穢国の尊さを拝まざるにはいられませぬ。大聖釈尊より聖人に至る一貫の流れは、あたかも一人の意志が次々と人間を配置したようであります。どうしても誰か一人でやつた仕事としか思われませ

ん、しかし、かくりレー棒を伝えてゆくように、しかも新らしく一宗を發揮しつつ、整然と歴史的役割が成就されて行つたのは、この聖者の一人一人が衷心の声に忠実に、強く真実に救いを求めて歩まれたが故であり、そして、その受け取られた教えを、誠に忠実に合掌して受け取られたが故であります。洛陽の都に於いて菩提流支三蔵に偶然に邂逅される者が鸞師でなくてもよかつたはずであります。三論宗の中にも外にも学者はあつたでありましょう。しかるに如来は何故に支那に於いて鸞師を捕らえて、この重大使命を成就せしめたか考えて見なくてはならぬことであります。この和讃をおわります。

二、無礙の光益

「盡十方の無礙光は 無明のやみをてらしつゝ、

一念歡喜するひとを かならず滅度にいたらしむ。」

無礙光の利益

前の和讃に於いて、信心、即ち一心の讚嘆を了りました。これから以下五首は、その一心の徳、その徳の利益を挙げられるのであります。そしてその徳益を挙げるに当つて、先ず総じて仏の無礙光の利益を挙げることによつて、一心の徳益を示されるのであります。

無礙光は仏徳の中の最第一であります。光明無量、寿命無量の二徳は、仏徳中の主徳でありまして、この光寿二無量において外に阿弥陀仏はないのであります。しかし無量寿がその体となり、無量光が相用となつているのでありますから、無礙光の徳には自ら無量寿の徳は内具されているのであります。そこで、ここでは無量光のみを挙げられるのであります。無礙光は一心所帰の仏徳、一心はその無礙光に対する能帰の信相、言いかえると、無礙光の徳の回向顕現であります。でありますから能所不二一体、無礙光の徳の全領をにおいて外には一心はないのであり、又一心の信心なくしては無礙光の徳も發揮されないものであります。

衆生は、無礙の仏智によつて、一心を發起するのであります。一心を發起して正定聚に住する身となり、やがて浄土において滅度の証果を成就するのであります。よつて往生即成仏の利益は、一心の徳益ではありますが、それを所帰の仏徳の上から讃えられて、無礙光の利益とされたのがこの和讃であります。

無明のやみ

「尽十方の無礙光は 無明のやみをてらしつゝ………」

衆生の一切は無明の闇から生れ、無明の闇に包まれています。そして更に更に深い闇を生みつつあるのであります。一切の罪悪は無明のやみから生れ、罪悪は苦悩を生みます。苦悩はやみそのものであります。今日も毎日、苦悩に沈んでいる同胞から同胞へと巡礼している私は、年とともにいよいよこの世のやみのふかさを痛感せずに

はいられません。否、私自身のうちに、ますます深い深いやみのあることを知らされます。やみにある身を知らされます。一切衆生は闇にある。果てしなき生死無明の闇にある。念仏する時、いよいよこのことが明らかにされて来ます。尽十方の無礙光は、そのやみを照して下さるのであります。仏智の光は、このやみを照して下さるのであります。

「無明の闇」とは何のことであるかと申しますと『大乘義章五』には、

「痴暗心体無慧明故曰無明」 一痴暗の心体慧明なし 故に無明と曰う一

「痴暗の心」とは、痴はおろか、暗はやみ、するとやみとは、痴かなところをやみとあるのであります。即ち愚痴の心のことであります。この痴暗の心というものは、何がその体であるかと言えば「慧明なし」であつて、智慧の光明がないのであります。でありますから、別に体と言つても実体があるわけではありません。喩えば、深夜の暗には、万物ごとく墨の如くであつても、実に体があるわけではないが如くであります。痴暗のやみとは、慧明、即ち智慧の光がないことであります。

『大乘起信論』には、

「不如実知真如法一」 一実の如く真如の法は一なりと知らず一

とあります。これを根本無明と言ひまして、真如に対する正しい智慧の眼が開いていないことであります。真如の徳が完全に現われたならば仏であります。わずかの煩惱が残つていれば菩薩であります。この真如の法に対する痴暗が根本無明となつて、それから一切の悪業煩惱が出て来るのであります。そこで悪業煩惱の一切を枝末無明というのであります。

以上の説の如き無明を、これを通無明といいます。広く一代仏教の根本に明かされる所の無明であります。次に別無明とて、浄土真宗の上から言えば、根本無明とは仏智疑惑のことであります。仏智を疑うこと、それが無始生死の流転の根源であります。

『大無量寿経下巻』には「此の諸智に於いて疑惑して信ぜず」と言い、「其れ菩薩有りて、疑惑を生ずる者は大利を失うと為す。」とあります。本仏に対する疑惑不信こそはまことに根本無明であります。この疑惑無明によつて一切の功徳を失うが故に「為失大利」と言われるのであります。その反対に、仏智を信ずる者は「弥勒当に知るべし、彼の化生の者は智慧勝るるが故に」と言い、「其れ、仏の名号を聞くことを得るありて、歡喜踊躍し、乃至一念せん、当に知るべし、この人大利を得と為す」と大經には有ります。以上の如き仏智疑惑の根本無明から、一切の悪業煩惱の一切無明は生まるるのであります。

以上二種の無明(通と別)は、一は広義のものであり、一は狭義のものであります。が故に、根本的に異つたものではありません。これについて私はこうも考えられると思ふのであります。聖道門的な通無明は、特に如来正覚の智慧によつて内観される衆生の相、即ち仏智にうつる衆生の相、惑業苦そのものであります。そして、疑惑無明は仏智に向う衆生の胸中の無明相だと思われれます。

やみをてらす

尽十方無礙光は一心帰命の仏体そのものであります。そこで、無礙のみ光は一心を通して衆生の上に救いを成就して下さるのであります。み光は衆生の心を照らす、このことを『尊号真像銘文』には、

「尽十方無礙光如来ともうすは、すなわち阿弥陀如来なり。この如来は光明なり、『尽十方』というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくしてことごとくみちたまえるなり。『無礙』というはさわるることなしとなり。衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。『光如来』ともうすは阿弥陀仏なり。この如来はすなわち『不可思議光仏』ともうす。この如来は智慧の相なり。十方微塵刹土にみちたまえりとするべしとなり。」

この御文を拝読して見ますと、このようなことがうかがわれます。如来はみ光である。そして、その光は「十方世界を尽して悉くみちたまえるなり」とか、「十方微塵刹土にみちたまえりと知るべし」とか言われる、普遍の光、光明徧照十方世界の光であることであり、今一つは、このみ光は無礙のみ光であること、「無礙というは、さばることなしとなり、衆生の煩惱悪業に碍えられざるなり」がそれであります。

この二徳は、尽十方であればこそ無礙であり、無礙であればこそ尽十方であるのでありますが、特に「てらす」ということは無礙のころであります。同じ『銘文』に、『仏心光』は無礙光仏の御ころともうすなり、『常照』はつねにてらすともうす、『つね』というは、ときをきらわず、日をへだてず、ところをわかず、まことの信心ある人おぼ、つねにてらしたもうとなり、『てらす』というは、かの仏心光におさめとりたまうとなり、『仏心光』はすなわち阿弥陀仏の御ころにおさめたまうとするべし。」

とあります。これによつて知らるるが如く、てらすとは仏心光に摂取されることでもあります。仏心光に摂取されるが故に無明のやみを破られるのであります。すでに申しましたが如く、やみとは痴暗であり、疑惑でありますから、愚痴のやみであります。愚痴のやみは智慧の光によらねば破ることは出来ません。

「仏の光明は是れ智慧の相なり、此の光明は十方世界を照らしたまうに障碍有ることなし。能く十方衆生の無明の黒闇を除くこと、日月珠光の但空穴中の闇を破するが如きには非ざるなり。」(論註)

眞実の智慧あるものは、自ら智慧ありとは思わないで、智慧に照され、智慧に摂められ、智慧の光によつて静かに愚悪の自性を内観して生きてゆくのであります。智慧は、私に属するものではなくて、如来のものであり、眞理自体のものであります。その徧照普遍平等のみ光によつて限りなく光ならぬ業苦を内観して生きるものこそ、大地にあつて一番正しく生きるものであります。

なお、一つ頂かなくてはならぬことは、『過度人道経』(眞仏土巻御引用)に、「阿弥陀仏の光明は極善にして善の中の明好なり。甚だ快きこと比無し。絶殊無極なり。」

と言つてあることであります。み光は、善中の善、至善中の至善、極善中の極善、全き大善そのものであります。衆生の善は善のようでも、つきつめて見れば、未通つた

ものでも、純粹なものでもありません。善らしく騒げば騒ぐほど、その底には不善、煩惱が宿されています。

如来の光明は、全き善、極善にてまします。その極善によって照され、極善中に摂められ、極善を回向されるのであります。故に、

「見たてまつる者、慈心歡喜せざる者莫けむ。世間諸有の淫泆、瞋怒、愚痴の者、阿彌陀仏の光明を見たてまつりて、善を作さざるは莫きなり。」（過度人道經）
と説かれるのであり、

「其れ人民善男子善女人有りて、阿彌陀仏の声を聞きて、光明を稱譽して、朝暮に常に其の光明の好を稱譽して、心を至して断絶せざれば、心の所願に在りて、阿彌陀仏国に往生す。」（同上）

と讃えられるのであります。

「やみをてらす」とはまことに、至極の大善たるみ光に是の如く生かされることであります。極善なるが故に極悪を自証せしめつつ、その自覚を通して、根本の暗をきり破りたまうのであります。無礙光の徳、即ち一心の徳、知るべきであります。

如来のみ光は闇を照らして下さる。

「この如来は光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなければ不可思議光仏ともうすなり。この如来十方微塵世界にみちみちたまえるがゆえに無辺光仏ともうす。しかれば世親菩薩は尽十方無礙光如来となづけたてまつりたまえり。」（一念多念証文）

この如来は光明である。光明は智慧である。智慧は光の形である。このことは何を語らんとするのであります。如来の光明とは智慧のことである。智慧というのは光である。かくの如く順と逆と両方から言われるのはどういうわけでありましょう。

先ず「智慧は光である」ということは、智慧は照すものである、ということでありましょう。そこで「尽十方の無礙光は無明のやみをてらしつつ……」と言われるのであります。

「光は智慧である」と聞く時、この光は、外から照す光でなくて、内に内観せられる光である。衆生の愚痴や疑惑のやみを照す光であることがうかがわれます。智慧は内にあるもの、内に輝くものであります。

「智慧は光である」と言えば智慧は照らす光である。光は照すものである。照らされるものであるということになり、智慧は内から外に大用をあらわすものである。一切を照すものであるということが知られます。照らされる方から言えば、照されるのであって、握ることの出来ないものである。ただ照らし破られるものであるということになります。

それについて、如来無礙の光明に三つの相が説かれてあります。即ち、

一、照育

二、破闇

三、摂取

の三義であります。

照育というのは如来の光明がよく衆生を照らして育てて下さることです。信ずる時、はじめて如来は衆生の上にはたらしかけるのではないのであります。信ずる以前、如来の光明は育てて下さる。それによって、衆生に宿善を成就させて下さるのであります。如来のみ光のお育てによらねば、宿善開発して、如来のみ光に値うことは出来ないであります。私どもは、私が生れる以前、念仏する以前に、如来のみ光の中にあつたのであります。そして照し育てられたのであります。徧照のみ光は微塵世界にみちみちていたのであります。み光に育てられて宿善が成就した時、善知識に遇うのであります。善知識におうて、真実の教えを聞く時、宿善は開発するのであります。宿善が開発した時、そこに一念の大信が生れるのであります。

一念歡喜

光明徧照十方世界……如来の真実智慧は、無礙光となつて法界にみちみちてあります。その徧照照育の光は、母が子を育てるが如く、太陽が万物を育成するが如く、育てますから「光明の悲母」と言われ、又、本典総序には「慧日」と讃えられるのであります。一切衆生は限りなき反逆を企てつつも、この悲母の光懷に育てられているのであります。育てられてついに時機純熟して善知識の教法に会うのであります。真実の教えを聞くことによつて大法を領解し、大信自覚を成就して、一念如来の子として誕生するのであります。これまことに宿善開発であります。種子が芽を切るが如く、蕾が花に開くが如く、宿善なく、宿善開発しなければ、ついに救われることは出来ないであります。

でありますから、浄土真宗に於いては、この問題を最重要なるものとされております。かの五重の義に於いて、

- 一には宿善
- 二には善知識
- 三には光明
- 四には信心
- 五には名号

としてあるのは、その中間に光明を配して、三に立つて一、二を見れば、光明は照育徧照の光であり、三に立つて四、五をながむれば、光明は撰取の光たることを示されたのであります。宿善の成就も善知識にあうも全て光明の大作であります。しかして教えを聞くこと即ち光に値うことであります。これそのまま大信心の成就であります。

「尽十方の無礙光は 無明の闇を照らしつつ 一年歡喜する人を……」

一念とは、これを御本典巻末に、

「一念とは、斯れ信樂開發の時尅之極促を顕し、廣大難思の慶心を彰すなり。」

又云く、

「一念というは、信心に二心無きが故に一念と曰う。これを一心と名づく。一心は即ち清浄報土の真因なり。」

この二つの御文を頂きますと二つの意味があることが知られます。即ち一には、一心ということであり、二心なきこと、疑いなきことで、一心の異名であります。しかし、一念という言葉が一心ということのかわり名にはなりますが、一心を一念のかわり名にすることは出来ないであります。何故かと言えば、一念には「信樂開發の時尅之極促を顕す」意義があるからであります。即ち、初起の一念、一心がはじめてきざした時、その端的な時を顕すのが一念だからであります。その一念が相續する相が即ち一心であります。

宿善によつて善知識にあり、名号のいわれを聞いて信心歡喜するそこを、一念歡喜と言われたのであります。宿善開發はそのまま信樂開發であります。光にあうのであります。如来の智慧光そのままの信心の智慧を頂くのであります。

破闇満願

「尽十方の無礙光は無明のやみをてらしつゝ一念歡喜するひとを……」

光はやみをてらす……てらすと言つても、ただてらすのではありません。やみを破るのであります。破るとは自覺せしめることであり、闇を闇と知らされることであります。我が正体を照破されることであります。煩惱惡魔という奴は、その正体を見せることを一番嫌います。光を浴びてしまうとその働きの出来ないであります。闇に強く、光に弱いものが煩惱であります。ですから煩惱中心の人は、闇に於いて強く、光の前に弱い人であります。光を浴びずに闇にかくれた煩惱は、そのまま人間の全人格の推進力となつて動かします。それが今、久遠の清淨光を浴びるのでから、逃げようとしています。こうした御法の会座にしばらくされると「まるで地獄に墮ちた気がする」という人があるのは、段々と暗くなるからであります。

享樂から信心に、煩惱から如来に、旅から家郷に、ここに一大転回、回心懺悔帰入するに当つては、誰も彼も、この煩惱の氣に入らぬ世界を通らなければなりません。しかし一度きざした願心は決してそのままにしてはおきません。必ず、真の光の世界に出さずにはおきません。傷に塩のしむ思いに堪えつつ、教えを聞いていると、やがて、み光はほのかに久遠の闇の根源を照し破つて下さるのであります。み光は我が正体を見せて下さる。罪惡生死の凡夫の三世相が光の中に照し出される時、はじめて大地に手をつかざるを得ないのであります。まことに邪見憍慢の惡衆生たることは、み光に照破されなければ知る由もないのであります。

しかし、かかる破闇は、そのまま満願であります。如来本願名号の全ては、回向せられて行者の大信心となつて下さるのであります。貪欲のものも、瞋恚のものも、愚痴のものも、喧嘩するものも、愛するものも、全て手勝手のいい方へ行きつつ、皆、暗い顔をしています。それが真実の志願でないからであります。然るに真実の教えの前に無条件に、しかしながら盲目的でなく、信順することの出来たものは「一念歡喜」と、無上のよろこびに至るのであります。真実のよろこびを得るのであります。これを満願と言われるのであります。衷心の願を満足するのであります。

摂取不捨

ここに於いて、照育の光は破闇の光となつて、衆生心内の事実となつたのであります。廣大難思の光は内に衆生を摂取したのであります。これより長く、光明は一心そのもののうちに光つて無限に摂取するのであります。光明、徧照十方世界、念仏衆生摂取不捨、み光は摂取の光であります。摂取し照らされるのであつて、握るのではない。手を放つて合掌念仏するものは、照らされるままに満足するものであります。知識は部分をつかみ、智慧光は全一にてらす。全一なる信心の世界は、尽十方無礙光如来の法徳そのまま、み光さながらの、光明の広海であります。

歡喜と慶喜

この御和讃には「一念歡喜」とあり、信巻には「一念とは……廣大難思の慶心を彰すなり。」とあります。この歡喜と慶喜との違いは『一念多念証文』に出ております。

『歡喜』は、うべきことをえてむずと、さきだちて、かねてよろこぶこころなり……

慶は、うべきことをえて、のちによるこぶこころなり。」と言ひ、又、

『歡喜』というは、『歡』は身をよろこばしむるなり、『喜』はこころによるこばしむるなり、うべきことをえてむずと、かねてさきよりよろこぶこころなり。」

とあります。信心は如来の全てを得させて頂いたことにおいて慶喜であり、無限の未來、永遠の彼岸をのぞむが故に歡喜であります。不動の安心と、不退轉の精進を一念にはらむのであります。

尽十方の無礙光は、衆生の一心帰命の仏体そのものであります。その無礙の光明は、衆生の心内にある無明を照らし破つて下さるのであります。まことに教えを聞くことが出来た時、この心中の無明の闇を破つて下さることは、明らかな事実であります。信心の世界がそこに開けて、我等が信心歡喜と、信証し得る事実となつて下さるのであります。一念歡喜とは、眞実信心の發起する端的を表わされたものであります。まことに一念歡喜とは、衆生の心想事成に顕現回向せられた、金剛不壞の事実であります。

無礙光はただに闇を破るのみならず、智慧光によつて、衆生の上に尊い道を成就して下さる、照し出して下さるのであります。これを満願と言われるのであります。満願とは願いを満たして下さることはありませんが、願を満たすとはどういうことでしょうか。欲が願いを満たしたと言えば、喉が渴いたとき、水を飲む。飲んだらそれで満たされて水は欲しくなくなる。その上飲むと体に悪い。そうしたものがあります。ところが、信心の世界で満願するとは、正しく、初めて、心のどん底に充ちな満足感を得るのではありますが、しかし、それであつて、もう見るのも嫌いといったものとはちがつて、いよいよ聞かすにはいられないものであります。願があつてそれを満たす、それだけではなくて、願が生れたこと、そのこと自体、願自体が満足と歡喜を持つてるのであります。願が誕生したこと自体が満足なのであります。

でありますから、満たされたら飽きる貪欲とは本質に違うのであります。したがつて、破闇満願は、花火線香の如く一時的なものではなくて、不斷に相續するものであります。不斷に相續する、永遠に貫くものが願でありまして、それであるが故に同時にこれが「道」といわれるのであります。無上菩提、即ち無上道であります。ま

ことに無礙光は、貪瞋煩惱の唯中に、本願一実の大道、無礙不退の真実道、金剛不壞の白道を成就して下さるのであります。この道が現われた時、全一な慶喜を得るのであり、無限の未来をはらむ歡喜を得るのであります。

歡喜とは純粹道義に自然に伴う道義の内的自由の風光であります。無礙の道味であります。外からの何ものもこれを奪うことの出来ないものであります。

往生

『讚阿弥陀仏偈和讚』に、

「光明てらしてたえざれば 不斷光仏となづけたり

聞光力のゆゑなれば 心不斷にて往生す」

とあります。この和讚は、常日頃、何時も有難く頂けるのでありますが「光明てらしてたえざれば」、仏の心光照護が不斷常住であります。ずっと一貫して照らして下さる。尽未来際を徹窮して下さる。そこに、自力の手を放し、他力の手を合掌して、生きさせて頂けるのであります。即ち、常住の道が光によつて照し出されるのであります。

すると、そこに願が芽生えます。それが聞光力であります。「光を聞く力」とはおもしろい表現であります。肉体に食物の消化力がなくなれば死であります。心に光を聞く力がなければ精神的な死であります。そこで浄土の慧命は、禅三昧為食とて、大法を心の食として持たれるのであります。

光を聞く力、光を聞くのであります。そこで光とは教えであります。教えを聞くことをせずして、光を見ようとし、あるいは見たと思つてゐることは大きな間違いであります。しかし、そのことはたましいがよく知つていまして、いよいよせつば詰つた時には、必ず人に語つて、教えを聞こうとするのであります。光を聞く力、この聞光力が誕生すること、それが救いであります。道に立たされたのであります。すると、聞光力とは、信力のことでもあります。しかし、この聞光力は光明てらしてたえざるが故に成就するのであります。光明不斷によつて往生するのであります。これを、「心不斷にて往生す」と言われるのであります。「聞光力のゆゑなれば、心不斷にて往生す」とは、まことに有難いことでもあります。

信心即大善

話が少し後先するようではありますが、聖人は真仏土の卷に、この光明無量の願の成就文を出していられますのでありますが、『大經』の成就文の次に『過度人道經』の成就文をも出していられます。その中に、こういう御文があります。

「阿弥陀仏の光明は、極善にして善の中の明好なり、其れ快きこと比無し。絶殊無極なり。阿弥陀仏の光明は、清潔にして瑕穢なし、缺減無きなり。」とか、又、

「光明の中の極好なり。光明の中の極雄傑なり。光明の中の快善なり。諸仏の中の王なり。光明の中の極尊なり。」等とあります。

これによりますと、仏の光明は、善中の至極の善である。快き善であるとあります。光が極善であるが故に、衆生に於いて破闇満願の歡喜を与えるのであり、道を成就す

るのであります。光明にてらされるとは、至極の大善にてらされることでもあります。清潔、至極の大善に摂取されることでもあります。そうでなければ、そこに往生ということとは出て来ないのであります。衆生が往生するということは、全くこの光照の利益なのであります。

そこで、衆生が光によつて大信心を獲得するということは、大善を獲得することになるのであります。火に照されれば熱くなり、太陽に照されれば枝葉が茂り、賢人に照されれば賢くなり、善に照されれば善に至るといふことは、自然であります。光明が極善でありますから、信心も極善であり、光明が快善でありますから、信心も快善であります。快善とは快樂の大善であります。快樂は歡喜であります。安穩であります。そこで、先の『過度人道経』には、

「世間諸有の姪洩（貪愛のこと）、瞋怒、愚痴の者、阿弥陀仏の光明を見たてまつりて、善を作さざるは莫きなり。」

と言われるのであります。善とは実に信心のことでもあります。又「見たてまつる者、慈心歡喜せざる者無し。」と説かれます。大善に歡喜はつきものであります。この一念歡喜から往生の大道が開けるのであります。

必至滅度

「かならず滅度にいたらしむ。」とは、必至滅度でありまして、これは第十一願を現わされたものであります。即ち第十一願は、

「設い我仏を得んに国中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずば、正覚を取らじ。」
 第十一願の大益を得るのであります。一念歡喜する、即ち回向の信樂に目覚めたものは、即の時、大乘正定聚の数に入り、やがて、彼の土に至つて、滅度の証を開くに至るのであります。今、この正定聚から滅度への往相回向を「尽十方の無礙光は 無明のやみをてらしつつ 一念歡喜するひとを かならず滅度にいたらしむ」と、無礙光の利益として説かれたのであります。

なお、聖人は、証の卷には『無量寿如来会』の願文をお引きになりました。それは、

「若し我成仏せむに、国の中の有情、若し決定して等正覚を成り、大涅槃を証せずば 菩提を取らじ。」
 とあります。

即ち『大経』の定聚が等正覚となり、滅度が証大涅槃となつてゐるわけであります。正信偈にはこの『如来会』によつて「成等覚証大涅槃 必至滅度願成就」と讚嘆せられました。等正覚とは「正覚に等し」き位で、五十一段の菩薩位のことでもあります。これを一生補処とも言われます。「一生にして仏処を補う」が故であります。この等正覚に入る一念歡喜の人は、必ず大涅槃の証を得るのであります。

滅度

滅度に至る、大涅槃を証する、滅度も涅槃も同一ではありませんが、証大涅槃という言葉が、仏果の意味をより明かに出されたようであります。浄土に至れば、浄土の国徳として、涅槃の証を開覚するのであります。そこで信巻には、

「念仏の衆生は、横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念之夕、大般涅槃を超証す。」と讃えられてあります。大般涅槃とはどんな証であろう。自然法爾章には、
 「ちかひのやうは無上仏にならしめむとちかひたまへるなり。無上仏とまをすは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆゑに、自然とはもうすなり。かたちもましますとしめすときは、無上涅槃とはまふさず。かたちもましまさぬやうをしらせむとて、はじめて阿弥陀仏とぞ、ききならいて候。弥陀仏は自然のやうをしらせむれうなり」

ここで自然とは無為自然のことです。無為自然のさとりをあらわして「無上仏にならしめむとちかひたまえるなり、無上仏とまふすはかたちもなくまします。」と仰せられたのであります。お浄土は、三種莊嚴二十九種と顕われれば顕わるるほど、いよいよ無相の世界、久遠の法身そのままの智慧の世界たることを示されるのであります。形が形のまま固定されるのが迷いの執着であります。しかし、空もまた単に空のみではない。真空妙有と言つて、無為法身が色を越え形を超えておればおるだけ、願心莊嚴とて、妙有の莊嚴を現わすのであります。しかし形を現わし、相を示現しても、無相の涅槃界であります。これ即ち第一義諦妙境界と言われる所以であります。

すでに、証大涅槃とは無上仏とならしめたまうこと、そしてそれは無為自然の世界だと言いましたが、無為自然ということは、浄土の相、即ち果の世界のことです。もし、これを因の世界から言えば願力自然の世界であります。願力自然の世界は、我等の念仏の世界、現実眼前に展開されている救いの事実、今、ここに回向顕現して、自然に、如来浄華たる大信の念仏行者を不退転に生かしているこの願力であります。信心の世界はこの願力自然の世界であります。

しかるに、この願力自然の背後にあつて、その体となるものは何であるか、これ即ち無為自然の世界であります。でありますから、事実の世界、色や形の世界の奥にあつて、色や形を生かしている、限りなく深くして底のない世界が、無為自然の境地であります。経には「如来の智慧海は深広にして涯底無し。」と言われるのも、無為自然の世界の底なきを示されたものであります。この如来の眞実智慧は尽十方無礙光の体であります。この底なき世界によつて一切の世界は生かされるのであります。

聖人は証巻に、
 「正定聚に住するが故に必ず滅度に至る。必ず滅度に至れば即ち是れ常なり。常樂は即ち是れ畢竟寂滅なり。寂滅は即ち是れ無上涅槃なり。無上涅槃は即ち是れ無為法身なり。無為法身は即ち是れ実相なり、実相即ち是れ法性なり。法性は即ち是れ眞如なり。眞如は即ち是れ一如なり。然れば、弥陀如来は如従り来生して報応化種種の身を示現したまう。」

と仰せられました。これによりますと、滅度に至るとは、衆生を常樂の境、寂滅の世界に至らしめられることでもあります。一切の迷妄生死の差別を超えた寂滅の世界、こ

れこそ真解脱と言われる世界であります。生もなく死もなく、寂靜無為の常住の価値の本源であります。「諸経のこころによりて弥陀和讃」には、

「無上は真解脱 真解脱は如来なり

真解脱にいたりてぞ 無愛無疑とはあらわるる

平等心をうるべきを 一子地となづけたり

一子地は仏性なり 安養にいたりてきたるべし

如来すなわち涅槃なり 涅槃を仏性となづけたり

凡地にしてはさとられず 安養にいたりて証すべし」

人生では涅槃の大功徳も因のすがたとして部分しか現われない。仏の回向によって、信心仏性をたまわって、念仏の世界に出されても、凡地にあつては涅槃の価値は全現しないのであります。「安養にいたりて証すべし」彼岸に至つて完成するのであります。信心仏性は因であり、涅槃はその果であります。しかし因果不二同性の世界であります。因の中に果を内在し、因はやがて果に至る。「一念歡喜するひとをかならず滅度にいたらしむ」、頂くべきであります。

阿弥陀如来もまた、この価値の本源たる一如従り来生し、報身応化身と無量の身を示現して、法界に浄土を莊嚴し、衆生を救い、仏事を成就せられるのであります。無量壽、無量光の仏徳も、この大涅槃の徳そのままの全現に外ならぬのであります。衆生もまた、主伴同性一味とて、み親と一如一体なる証りの世界に至らしめられるのであります。一切衆生をして大涅槃のさとりを開かしめることは、浄土の國徳の然らしめるところであります。今は無礙光の利益として説かれたのであります。この和讃をおわります。

三、 惑智無礙

「無礙光の利益より 威徳広大の信をえて

かならず煩惱のこおりとけ すなはち菩提のみづとなる」

智慧と慈悲

「無礙光の利益より 威徳広大の信をえて……………」

前讃におきまして、一念歡喜の大信は、無明の闇を照破して破闇満願せしめたまう処の、尽十方無礙の光明によって成就することを頂きました。しかし前讃の本意は、一念歡喜のひとが、第十一願によって、必ず滅度に至らしめられることを示されるにありました。それは救いの積極的意味であります。念仏大信の衆生は救われる。救われることは、聞信の一念に正定衆の位に入り、やがて必至滅度と、大涅槃の境に至らしめられることであります。必至滅度とは、証大涅槃とて成仏することでもあります。これは誠に救いの本意であり、その積極的な願意の表示であります。

しかるに今讃は、同じく無礙の光益を示されるのであります。それを、救いの消極的方面、即ち衆生のもてあましている所の無明煩惱がどうなるか、ということを示

されるのであります。この御和讃から己下四種は、大体に於いて同じような趣きが示されてあるのであります。

正定聚不退の菩薩位に即得往生して、彼岸に至って弥陀同体の証果を得ることが、大無量寿経の宗致、智慧の宗教であるならば、地獄一定の機を深信せしめて、罪障を消滅し、煩惱を退治して、如何なる下下品の衆生をももらさぬというのが、深重なる大悲の真実でありまして、『観経』の果さんとする使命であります。もちろんこの二者は決して別なるものではありません。絶対唯一の救いの両面ではあります。但し、往生成仏という証悟の方面との差であります。如何なる悪人をももらさぬという慈悲門と、一切を高めずにはおかぬとの智慧門と、それが不二の大用を発して衆生は救われるのであります。

威徳広大の信

「無礙光の利益より 威徳広大の信をえて……………」

信心は如来の光明よりおこるのであります。しかしその信心を威徳広大の信と言われるのであります。威徳広大とは、仏の光明が威神功徳の広大なることでもあります。しかるに今何故に威神功徳広大なる信と言われるのでありましょうか。そもそも威徳広大とは如来の光明の徳相を讃えられたる言であります。

大無量寿経には、

「無量寿仏の威神光明は、最尊第一にして諸仏の光明の及ぶこと能わざる所なり。」と示されてあります。無量寿は体であり、無量光は相であります。無量寿仏の威神光明は、法界に於いて最尊第一であります。一切の諸仏の及ばない所であります。誠に天親論主が帰命尽十方無礙光如来と讃えられたが如く、如来とは光明であります。無礙の智慧光であります。大経に言く、

「無量寿仏の光明は顕赫にして、十方諸仏の国土を照耀したまうに、聞こえざること莫し。但我今其の光明を称するのみにあらず、一切諸仏、声聞、縁覚、諸菩薩衆悉く共に嘆譽したまうこと亦復是の如し」と。

如来の光明は一切の仏国を照し出す光であり、諸仏菩薩を誕生せしめて、それによつて讃嘆せられたまう智慧光であります。そこで更に大経には、

「もし衆生有りて、其の光明の威神功徳を聞いて日夜称説し、至心不断なれば、意の所願に随いて其の国に生るることを得、諸の菩薩声聞大衆の為に、共に嘆譽して其の功徳を称せられん、其れしかして後、仏道を得る時に至りて、普く十方諸仏菩薩の為に、其の光明を歎ぜられんこと亦今の如くならん。」

衆生は「聞其光明威神功徳」と、光明の威神功徳の廣大を聞くのであります。聞くとは信ずることでもあります。「聞光力のゆえなれば 心不断にて往生す」光は見るのではなくて、聞くのであります。聞いて信ずる者は不断光の力によつて不断相統一貫するのであります。かく威徳広大なる光明を聞信する者は「諸の菩薩大衆の為に共に歎譽してその功徳を称せられ」るのであります。しかして仏道を得る時に至れば「普く十方諸仏菩薩のために、その光明を歎ぜられんこと、亦今の如くならん。」何時しかに、讃嘆せられるものは、本仏を超えて光に生かされる衆生であることは注意すべきこと

であります。これ本仏無量寿仏の光明は、行者のものとなり、菩薩の光となり、如来浄土の眷属の光となるのであります。諸仏菩薩は如来の光を獲たる浄土の人を歎じたまうのであります。

生仏不二の徳

第十八願の世界は不可思議であります。

「無礙光の利益より 威徳広大の信をえて」 威徳広大とは無礙光のことでありま
す。しかるに、ここでは「威徳広大の信」と、行者の信の上に威徳広大の文字は冠ら
されてあります。

如来の徳は行者の徳であります。如来の全ては残すところなく、衆生の上に回向
せられます。衆生の上に成就せられた功德宝海は、微塵も行者の自力によつて加えら
れたものではありません。又加えることを許されないのであります。でありますか
ら、仏智はそのまま衆生の信心の智慧であります。仏徳はそのまま行者の徳でありま
す。本仏の威徳広大は、そのまま信心の行者の威徳広大であります。そこに、衆生と
仏と全く不二の徳が成就されてあるのであります。

衆生の大信心は、そのまま本仏の大海であります。法が広大であれば、機も亦広
大である。本願に普徧広大なる徳を具足するが故に、下下品の衆生の信心も亦普徧広
大なる徳を具足する。この機法一体の世界こそ第十八願の世界であります。聖人は、
信巻末に、他力真実の信樂を讃嘆して「廣大難思の慶心」と仰せられました。即ち威
徳広大の信のことでもあります。

20

威徳とは威神功德、広大とは仏徳法界に周遍するが如きにいうのであります。そ
れでありますから、広大とは尽十方のこと、威徳とは無礙光のことであります。そこ
で、威徳広大の信とは尽十方無礙光を全うしたる大信であります。行巻に云く、

『無量寿如来会』に云く、『広く是の如き大弘誓願を發して、皆已に成就したまへり。
世間に希有なり。是の願を發し已りて実の如く安住して種々の功德具足して、威徳
広大の清浄仏土を莊嚴したまへり』と。

又、憬興の『述文讚』を引いて云く、

『仏の成徳広大を聞くが故に、不退転を得るなり』と。

この『如来会』の威徳広大の言は、法体の身上について明かされたものであり、『述
文賛』の語は、聞信の世界について出されたものであります。それによつて今、聖人
は衆生の信心を「威徳広大の信」と仰せられました。これ如来の尽十方無礙の徳を聞
いて生ずる心であり、尽十方無礙光を全うしたる信行であります。故に、衆生の信も
また威徳広大の信といわれるのであります。

本仏の威徳広大は、第十七願の誓願力によつて、恒沙の諸仏の上にそのまま成就し
ています。自ら威徳広大の信に生きたまうて、本願名号の真実を説きたまうもの、即
ち諸仏如来であります。しかして、その教えを聞いて信心歡喜するものは即ち信心の
行者であります。でありますから「無礙光の利益より 威徳広大の信を得て」との言
には、本仏より諸仏、やがて不退の行者と、一貫する所の威徳広大の信であります。

本讚の典拠

この和讚の典拠はこれを『論註』に見出すことが出来ませんので、これを源信和尚の『往生要集』にとりまします。『往生要集（中末）』に、

「應念今我惑心具足八萬四千塵勞門、彼阿弥陀仏具足八萬四千波羅蜜門、本来空寂一体無礙。貪欲即道。患痴亦如是。如水與水性非異処。故経言煩惱菩提体無二。生死涅槃非異処云々。我今未有智火分。故不能解煩惱水成功德水。願仏哀愍我如其所得法定慧力莊嚴以此令解脱。如是念已举声念仏而請救護。」

以上の文は、『往生要集』十門中の第五門、助念方法で、その中に七門がありますが、その第四に止悪修善を明してあります。この止悪修善を明すについて、『浄土論』の三種の菩提門相違の法を遠離し、三種の随順菩提門の法を満足するを説ける文を引き、この意によつて止悪修善を説かれ、その後、

「善業は是れ今世に学する所なれば、欣ぶと雖も動もすれば退き、妄心は是れ永劫に習う所なれば、厭うと雖も猶起る、既に然らば、何の方便を以て之を治せんや。」と問答し、次第禅門（天台大師）によつて、

(一) 沈昏闇塞の障を治せんには、応に応仏を観念すべし。
(二) 悪念思惟の障を治せんには、応に報仏の功德を念ずべし。
(三) 境界逼迫の障を治せんには、応に法仏を念ずべし、
と三種の煩惱対治の方法を示し、更に自ら対治の方法三種を示して、

一、煩惱を呵責すること悪賊を驅るが如く、我が三業を護ることは油鉢を撃ぐるが如くせよ。

二、四句の空観によつて煩惱の根源を推求せよ。

三、先に出した「三には当に念ぜよ、今わが惑心に具足せる云々」の文の如く、称名請護せよ。

以上の如くお説きになりましたが、今はその第三対治の方法の世界に明かされた意によられたものとされるのであります。

煩惱と菩提

「應に念ぜよ、今我が惑心に具足せる八萬四千の煩惱は、阿弥陀如来の八萬四千の功德と、本来空寂一体無礙である。貪欲即ち是れ道であり、瞋恚、愚痴も亦是の如くである。譬えば氷と水との性の異なることなきが如くである。」

三論や天台等の法門では、智慧によつて開覚することを明します。煩惱即菩提、生死即涅槃と悟るのであります、でありますから、無明煩惱（氷）即ち菩提（水）であるから、あらゆる煩惱の断すべきものは一法もなく、生死即涅槃であるから、生死をはなれてさとするべき涅槃なし。迷いの体は無始の無明妄念であります。妄念は、夜の闇に体なきが如く、体がないから、したがって悟るべき菩提の体のあるべきはずなし、というのであります。しかし、それはもちろん、迷いの凡夫のままに放任された世界ではなくて、智慧による証悟なのであります。そこで源信和尚は「我今、未だ智火の分有らず、故に煩惱の氷を解いて功德の水を成ずること能わず」と仰せられるのであります。

かく自らの智慧によつて煩惱の水を解いて菩提の水とすることが出来ぬところに、他方の世界が開かれて来るのであります。

「無礙光の利益より 威徳広大の信をえて

かならず煩惱のこほりとけ すなはち菩提のみづとなる」

威徳広大の信を獲れば、信心の智慧によつて、必ず煩惱の水とけ、即ち菩提の水となるのであります。

融惑成智

「善業は是れ今世に学する所なれば、欣ぶと雖も動もすれば退き、妄心は是れ永劫に習う所なれば、厭うと雖も猶起る、既に然らば何の方便を以て之を治せんや。」

誠に我等は我と悟り得ぬ凡夫であります。この我と悟り得ぬ凡夫をたすけんが為の如来の誓願であります。如来は、光寿二無量の誓願によつて、無量の功徳を光明に撰めて、この智慧の光明によつて、衆生の上に威徳広大の信を御成就して下さるのであります。それによつて、速得菩提と往生成仏の大因を回向して下さるのであります。この威徳広大の信によつて、

「かならず煩惱のこほりとけ すなはち菩提のみづとなる」

と、無礙光の大益によつて、惑を融じて智を成ずることを明されたのであります。この融惑成智の大益こそ「本願円頓一乗」と示される中の円頓の益なのであります。

「本願円頓一乗は 逆悪撰すと信知して

煩惱菩提体無二と すみやかにとくさとらしむ」

本願は、円融円満頓極頓速と、実大乘中の大乘であります。今ここには、その円頓の深いおぼしめしが出ていますのであります。円頓一乗教では、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、声聞、縁覚、菩薩、仏の十界において、他の九界を消滅せしめて仏界を出現せしめるのではない。ありのままの十界をありのまま、智慧によつてその全てを転じて仏果とすると説きます。もし断ずべき煩惱を認めるならば、権大乘と貶されるのであります。そこで、生死即涅槃とか、煩惱即菩提とか言われるのであります。本願が本願円頓一乗と讃えられるのは、誠に如来の光明は、衆生の一切をそのままに、転悪成徳し、融惑成智したまう所の、円融円満、頓極頓速、無礙広大なる大智海であるからであります。如来の光明の前に、我を消滅したり、廃悪修善しなければならぬものがあるならば、念仏門は実大乘の至極とは言われないのであります。

不思議なる哉、一度如来本願の大信海、即ち威徳広大の信心を得れば、今まで流転に流転を続けた煩惱は法性の水の氷結せるものである。氷が仏智の前に解ければ、即ち菩提の水である。如来の智慧光の前には、如何なる自力我慢、煩惱の水も解かされてゆくのであります。仏は、真実の大信の自覚を成就し、それを通して無礙光の益を衆生の上に具体的ならしむるのであります。信一念に、かかる広大なる世界を、因相に於いて成就し、彼岸に於いて、証知生死即涅槃と、果相に入るのであります。かくの如く衆生の上に成就されればこそ、尽十方無礙というのであります。

四、罪徳無礙

「罪障功徳の体となる　こほりとみづのごとくにて

こほりおほきにみづおほし　さはりおほきに徳おほし」

円頓の益は

前讚と同一に、大信心における無礙光の円頓の益を挙げられる中、その第二に罪徳無礙を讃えられるのがこの和讚であります。即ち無礙光の益により、威徳広大の信を獲れば、罪障そのものが功徳となり、円融無礙の徳が行者の上に成就するのであります。正しく剣に当れば傷を受け、正しく火によれば焼かれるが如く、正しく真実の教えを受け取り、如来の智慧光に摂取される信心の火は、一切の罪障を焼いて功徳としなければおかないであります。信心が生活に現われるの現われのないと言っているのは、仏法が話になつているのであります。話になつていいる人が多ければ、話にしている方がほんとうのようにとれて来ます。

火という文字なら、太平洋一杯の太さに書いた所で、髪の毛一本焼きません。しかし事実の火なら、豆粒くらいの火さえ、これを手に持つことは出来ない。マッチ一本の火が時に大火事をおこします。如来円頓の法を危険なもののように思うのも、そして事実において剃刀の如く危険であるのも、共に、火の字を弄んで、無礙清浄なる炎王光が具体的事実としての火となつて、煩惱の薪を燃やさないのであります。憶えたのもつまらぬ、知つたのも駄目、無礙清浄なる超日月光によつて、三毒の業障がとけて徳となる世界でないと、この御和讚の尊さは知れないことでもあります。氷がとけて水となるのか、氷が氷のまままで仏法を弄ぶのか、考えて見ねばならぬことでもあります。円頓の益は具体的な事実であります。

罪障

罪障とは悪業のことでもあります。悪業は、そのままでは菩提の障りとなりますから、罪障というのであります。殺生、偷盜、邪淫、綺語、妄語、悪口、両舌、貪欲、瞋恚、愚痴等の悪業は、必ず因果の道理によつて罪罰を受けて、災禍即ち苦の果を受けます。苦は罪であり、悪業は苦の因であります。播かぬ種は生えぬ。播いた種はやがて刈らねばならぬ。悪業の因は必ず苦の果となる。そこで果(罪)を以て因(悪)に名づけて悪業を罪と云い、それが菩提の障となるから、罪障と名けられるのであります。今は時めく得意の人でも、甘えて悪業を造つておけば、やがて冷たい因果の鉄則の前に、我と我が身の罪障に泣かねばならない。煩惱悪業こそ恐れねばならないものであります。

煩惱(因) ↓ 罪障(苦果)

前讚

菩提(因) ↓ 功徳(涅槃ノ果徳)

今讚

煩惱(惑)はそれが根本となつて貪瞋痴となり、それがもととなつて八万四千の煩惱となり、その煩惱に引かれて無量の悪業を造ります。煩惱によつておこる業が、身口意に顕われて十悪等の悪業となり、善心思に引かれて心所の造つた業が、十善業となつて三業の上に現われ、それが更に無量の善となるのであります。無量の悪が十悪に帰し、無量の善が十善に帰するのであります。そこで惑(煩惱)を挙げれば十悪をともない、十悪は更に貪瞋痴に引かれて種々の相となります。同じ殺生でも貪によるあり、瞋恚によるあり、愚痴によるあり、悪業は煩惱によつて起り、煩惱は悪業によつて増長します。故に悪業煩惱とよばれるのであります。この煩惱悪業こそは菩提の為に障りとなり、生死への繫縛となりますから、業障といい、業苦といい、業繫とよばれるのであり、ここでは罪障といわれるのであります。

菩提と功德

菩提とは、旧には「道」と訳し、新には「覚」と訳されます。『智度論四十四』には「菩提秦言無上智慧」とあり、『注維摩』には「肇曰道之極者称曰菩提」とあり、『安樂集』には「菩提者乃是無上仏道之名也」とあります。かくの如き菩提に生きる心を菩提心と言われます。我が聖人は、他力回向の大信心、即ち威徳広大の大信心を称して、無上菩提心と仰せられました。自力の菩提心、聖道の菩提心は、これを仮の菩提心とせられました。

この無上菩提心こそは、煩惱の水をとつてやがて涅槃の果を得る所の、大因であります。功德とは涅槃の果徳のことです。『大経』の下巻には「具足功德蔵 妙智24 無等倫」とあります。無明煩惱の世界には眞実功德はなく、罪障は無明界の全てであります。これに反して菩提心は迷いの中にあつて覚を求むる心、闇の中の光であります。威徳広大の信こそは、無礙光によつて成就せられる眞実の菩提であります。一切の罪障を転じて涅槃の徳として下さる所の、罪徳無礙の世界であります。

願生浄土の宗教

浄土の法門は、指方立相の法門であつて、娑婆を捨てて浄土を願わしめたまうのであります。でありますから、迷悟差別し、因果差別し、淨穢差別する法門であります。でありますから、迷悟一如、淨穢不二と、軽々しく悟りますことが許されないので、「経に云く、煩惱菩提体無二、生死涅槃異処に非ずと云々。我今未だ智火の分有らざるが故に、煩惱の水を解いて功德の水を成ずること能わず。願わくば、佛我を哀愍して、其所得の法の如く、定慧の力をもつて莊嚴して此を以て解脱せしめよと、是の如く念じおわつて、声を挙げて仏を念じて、而も救護を請え。」(往生要集)

軽々しく悟りを自分の上に肯定しなかつた横川の聖者のみ心もしのばれます。悟つたように思い上つたり、開覚したように装うたりすることよりも、我が機の眞実に目覚めることこそ、もつと尊いことあります。智慧による、淨穢不二、迷悟不二の悟り、生死即涅槃、煩惱即菩提の絶対智見の成就せられないことを知つた者、「我今未有智火分」と、機の眞実、我及び人生の眞相を、我において見た者の前に開けて来るのが、願生浄土の宗教であります。如来の智慧の宗教であります。

不断煩惱得涅槃分

「罪障功德の体となる云々」の御和讃は、如来の智慧の回向によつて開いて来る宗教を示されたものであります。即ち自らの智慧によつて迷悟不二と悟ることの出来ないことがわかつた者の上に回向される、信心の智慧の大利益を示されたのが、この和讃であります。

『論註下』には

「莊嚴清淨功德成就とは、偈に觀彼世界相勝過三界道と言えるが故に。此れ云何ぞ不思議なるや、凡夫人の煩惱成就せるありて、亦彼の淨土に生ずることを得れば、三界の繫業、畢竟して牽かず、則ち是れ不断煩惱得涅槃分、焉んぞ思議すべけんや。」

とあります。淨土の清淨功德を説くに當つて、不断煩惱得涅槃分と示されたことは注意すべきことであります。不断煩惱得涅槃分というみ言は、お正信偈には、「能発一念喜愛心、不断煩惱得涅槃」と示されてあります。この不断煩惱得涅槃分の利益は、一念喜愛心、即ち如来回向の威徳広大の信によつておこるところの利益でありますが、鸞帥の御考えは、淨土に於ける証果即ち果の徳としてお示しになつたものであります。如来淨土の清淨功德の力は、一切衆生をして証を開かしめないではおかないのであります。即ち、大乘仏教の眞実証果たる

煩惱(惑) 即菩提(智)

生死(迷) 即涅槃(悟)

煩惱即菩提、生死即涅槃と、惑智一味、迷悟不二の眞証に至らしめるのであります。今この煩惱即菩提、生死即涅槃の二句に於いて、煩惱を挙げて菩提を略し、生死を略して涅槃を挙げ、煩惱と涅槃をとつて不断煩惱得涅槃と示されたのであります。これ全く迷悟の區別を立てながら而も迷悟を超え、惑智を分別しながら惑智を超え、善悪を分けながら而も善悪を一にする、円融無礙不可思議の大乗の悟りを示されたものであります。これ即ち眞実の証果であります。これを淨土に於ける証果、往生して得る当益を示されたものとせられたのは当然のことであります。『正像末和讃』には、

「弥陀の智願海水に 他力の信水いりぬれば

眞実報土のならひにて 煩惱菩提一味なり」

と示されたのもこれであります。『銘文』には「不断煩惱得涅槃というは、煩惱具足せるわれら、無上大涅槃にいたるなりとするべし。」と全く未来の証果としていられます。しかるに蓮如上人は『正信偈大意』に「不断煩惱得涅槃というは、不思議の願力なるがゆえに、わが身には煩惱を断ぜざれども、仏のかたよりは、ついに涅槃にいたるべき分にさだめますものなり。」と説かれて、現世に涅槃にいたるべき分にさだまること、即ち正定聚の位に定まることであるとせられました。

ここに於いて「涅槃分」の分の文字が、全分と一分と二様に頂けることになるわけであります。淨土に於いては、涅槃の眞実価値が全現するに對して、信心の世界に於いては、その一分が現われるのであります。即ち略本に、淨土に於いては「一如法界の眞身顯る」と示し、信心の世界をば「無上淨信の暁」と示されたのも、全分と一分

の差を示されたのであります。『御文章』には「されば無始已来造りと造る悪業煩惱を、残るところもなく願力不思議をもて消滅する謂あるがゆえに、正定聚不退の位に住すとなり、これによりて、煩惱を断ぜずして涅槃を得といえるはこの意なり。」とあります。

現生に於いてかかるいわれが成就すればこそ、その大因によつて涅槃の証果を得、真実智慧によつて、煩惱即菩提、生死即涅槃の覺りを開覺させて頂くのであります。智慧は、ものの真実の相を見せて頂く眼であります。「罪障功德の体となる　こほりとみづのごとくにて　こほりおほきにみづおほし　さはりおほきに徳おほし」　仏智の転悪成徳、仰ぐべきであります。

五、罪徳一味

「名号不思議の海水は　逆謗の死骸もとゞまらず

衆悪の萬川帰しぬれば　功德のうしほに一味なり」

名号不思議の海水

この和讃は名号不思議を讃えられるのであります。名号は如来の功德宝海であります。如来の全てであります。行巻に元照律師の文を引用して云く、

「況んや、我が弥陀は名を以て物を撰したまう。是を以て耳に聞き口に誦するに、無辺の聖徳、識心に攬入す。永く仏種と為りて、頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を獲証す。信に知んぬ。小善根に非ず、是れ多功德なり。」

これ誠に、名号不思議の徳を示されたものであります。又法相の祖師、法位の文を引きたまうには、

「諸仏は皆徳を名に施す。名を称するは即ち徳を称するなり。徳能く罪を滅し福を生ず。名も亦、是の如し。もし仏名を信ずれば、能く善を生じ、悪を滅すること、決定して疑い無し。称名往生、此れ何の惑か有らん。」

とあります。これ皆、名号の不思議の徳海を示されたのであります。したがつてお念仏の世界の尊さを示されたのであります。この和讃では、名号の広大の徳の大用を海水に喩えて示されたのであります。

光明と名号

信巻に、曇鸞大師の『論註』を引いてあります。その中に、

「彼の無礙光如来の名号は、能く衆生一切無明を破し、能く衆生一切志願を満てたまう。」

とあります。この『論註』の文が、この和讃の典拠であります。しかるに『論註』の文には、

「仏の光明は是れ智慧の相なり。この光明、十方世界を照すに障碍有ることなし。能く十方衆生の無明の黒闇を除く。」

とあります。この御文では、衆生の無明を破するものは仏の光明となっており、先の文では名号となっており。これは如何なることであろうか。これは名号と光明とは二つでないことを示したのであります。丁度太陽と日光と二つでないのと同様であります。光明とは名号の義であります。でありますから「名義の如く」と言われるのであります。名号をおいて外に光明があるのではないのであります。しかし智慧光の徳がなければ名号の義が明らかではありません。でありますから、仏の名号を尽十方無礙光如来と言われるのであります。これ名号を義に於いて示されたのであります。『阿弥陀経』には、「彼の仏の光明無量にして十方国を照すに障碍するところなし。是の故に号して阿弥陀と為す。」と説かれてあります。仏の名号に助けられるということとは、仏の光明に助けられるということでもあります。

しかしながら、名号は体であり、光明はその相用であります。でありますから善導大師は、光明名号の因縁ということをお説きになりました。衆生の信心は名号の父を因とし、光明の母を縁として生まれます。この光号因縁の力によつて信心の子を生みやがて生れたる信心は、更に、この信心が因となり、光明名号の父母が縁となつて、因縁和合成就して、長養して成仏するのであります。これを光号両重因縁と言われております。名号を聞信するに先だつて、光明の縁は衆生を育てています。この光明照育の縁が漸くにして宿善を開発せしめ、善知識に遇わしめて、名号を全領せしめ、その聞其名号信心歓喜の一念に、光明は衆生久遠劫来の闇を破り、破闇と共に永く衆生を光明の懐に撰取不捨するのであります。この照育、破闇、撰取と、光明の大用を顕現するところ、名号の全てが衆生のもつとして全領されているのであります。

彼の称名念仏しつつも、心に疑いがあり、心が暗くて、念仏に力も味もないのは、名号を受け取つたかに見えて、光明の破闇撰取の世界が成就していませんのであります。又信心があるかに見えて、それが一時の詠嘆におわり、念仏生活が成就しないのは、名号を全領していません。宗教は人間的感情による詩の国ではない。大行による全否定の世界に生れる真実の自覚であります。光明の悲母と、名号の慈父と、この光号因縁の世界が、この和讃の「名号不思議」の世界であります。不思議とは底なきものに直面した体験の声であります。

名号

「謹んで往相の回向を按ずるに大行有り、大信有り。大行とは、則ち無礙光如来の名を称するなり。斯の行は、即ち是れ、諸の善法を撰し、諸の徳本を具せり。極速円満す、眞如一実の功德宝海なり。故に大行と名づく。」

何という雄大にして莊重なる文字でありましょう。まことに永遠不滅の金字塔であります。この文の意を外にしては、至れる真実の生活は遂に成就しないではありません。

「謹んで往相の回向を按ずるに大行有り、大信有り。」

大行の受け取るべき無くしては、衆生の自力無明を粉碎して大信の成就することは不可能でありますし、又大信心の智慧なくしては、如何なる尊きものも遂に尊しとして受け取ることは出来ないのであります。逆謗の死骸も「まら」ざるは、大信

成就するが故であり、大信成就するは、名号の不思議広大の徳を全領するからであります。

一味の救い

名号は大海にも譬えらるべき広大なる徳海そのものであります。その如来の功德宝海は限りなき大用を持つております。大用とは、衆生を光明のうちに摂取して、救いを成就することであります。救いは如何にして成就せられるのであるか。それを説くには、如来の功德宝海の回向と、光明摂取を以てせられるのであります。この和讃は、名号の回向を語らずに、光明の大用を示されたものであります。しかし、光明と名号とは別のものではないことは、前に述べた通りであります。そこで「名号不思議の海水は」と出されたのであります。

この光明の徳を名号に摂めて示されたこの和讃をうかがいますと、衆生を表現した言葉が二つあります。「逆謗の死骸」というみことばと、「衆悪の萬川」というみことばであります。そしてその衆生の上に成就する救いを示した文字が「功德のうしほに一味なり」ということでもあります。

逆謗の死骸

「逆謗」とは五逆と誹謗正法であります。父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、仏身より血を流し、和合僧を破るといふ、この五逆は、人間の犯す罪悪の中でも、一番極重極悪の罪悪であります。人天共に許さざる大罪悪であります。しかしかかる恐るべき悪の根は、一切衆生の心の底深くはびこっているものであります。社会があり、法律があるが故に、殺しまでしないでも、親を呪い、親に反逆し、一切の聖者を斃さんとするが如き心は、心の底に動いております。親不孝の恐るべきがここにあります。不孝者は不忠者であります。一切の悪の根はそこにあります。

この五逆は造られた悪の事実であります。その根底に横たわっているものを、誹謗正法というのであります。五逆は誹謗正法の、形を取ったものであり、誹謗正法は、五逆の根であります。この五逆謗法が助けられるが故に「逆謗の死骸もとまらず」と言われるのであります。ここに気をつけねばならぬ文字は「死骸」であります。名号不思議の海水に摂取された時、恐るべき逆謗は死骸となるのであります。

逆謗は、いわゆる無間地獄の因であります。恐るべき苦悩は、それによつて一切衆生の上に出来するのであります。この大苦悩の因は、名号のいわれを聞いて信ずる一念に、弥陀の智慧光によつて消滅するのであります。如来大悲の本願によらねば、到底この逆謗の息の根を止めることは出来ません。この逆謗が死骸になるということは、ただの話ではありません。人間の上に開けて来る深い深い目覚めであります。自覚であります。今まで、仏とも思わず、法とも思わず、道とも思わず、ただ人間の醜い心のままに、悪のままに、享樂を追うて闇へ闇へと走っていた者の上に、如来のみ教えが耳に入りはじめて、教えを通して、そこに内観の世界が開けはじめ、光明の照破する処となつて、本願力回向の大信心の自覚が成就することによつて、この逆謗は、

名号の功德宝海の中に、死骸となるのであります。容易なことではありません。仏の教法に値わぬ限り、ついに死骸だとはわかりません。

曇鸞大師は「何等の相か、これ誹謗正法なるや」と問い、その恐るべき相を説いて、「若し仏も無く、仏の法も無く、菩薩もなく、菩薩の法もなし、と言わん。是の如き等の見をもて、若は心に自ら解し、若は他に従うて、其の心を受けて決定するを、皆、誹謗正法と名づく。」

と言ひ、更に、

「若し諸仏菩薩、世間出世間の善道を説きて、衆生を教化する者ましまさずば、豈仁義礼智信有ることを知らむや。是の如くんば、世間一切の善法皆断じ、出世間の一切の賢聖皆滅しなん。汝、但五逆罪の重たることを知りて、五逆罪の正法無きより生ずることを知らず。是の故に誹謗正法の人、その罪最も重し」と知らされました。一切の道を亡ぼし、尊き人を滅し、自らをも一切衆生をも暗に沈めようとする恐るべき心であります。どうしてそれが死骸になりましょう。眞実教による自覚、如来本願の金剛力によらずして、どうして死骸とわかりましょう。

回心皆往

善導大師は『法事讃』に、

「仏の願力を以て、五逆と十悪と、罪滅し生を得しむ。誹法闡提、回心すれば皆往く。」

と仰せられました。五逆も誹法も、皆、回心懺悔することによつて救われるのであります。今更に回心という文字の深さが思われることでもあります。回心という文字を、『唯信抄文意』に釈して『回心』というは自力の心をひるがえしつるをいふなり。」と仰せられました。自力の心をひるがえすことでもあります。自力の悪き心を捨てることでもあります。我を突つ張つて行こうとする心が、如来の本願眞実に随順する心にひるがえされるのであります。されば聖人は『自力の心をすつ』というは、ようようさまさまの大小聖人、善悪の凡夫の、みずから身をよしと思ふ心をして、身をたのみず、あしき心をさがしくかえりみず、また人をよしあしと思ふ心をして「不可思議の誓願、名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら救われることをお示しになりました。されば、救われるか否かは、回心するか、どうかにあります。しかしてその回心はただ本願力によるのであります。

逆謗の極悪も、名号不思議の徳を受け取つて回心すれば、逆謗の死骸もとどまらず、海水の一切をとかしてうしおとするが如く、一切を転じて功德の海水と一味にして下さるのであります。

海

『六十華嚴』には「譬えば大海の如し、十相を以ての故に、名けて大海と為す。能く壊するもの有ること無し。何等をか十と為す」といい、続いて大海十種の徳が説かれてあります。

一、漸次深し

- 二、死屍を受けず
 - 三、余水、本名を失う
 - 四、一味
 - 五、多宝
 - 六、極深入り難し
 - 七、廣大無量
 - 八、大身衆生多し
 - 九、潮、時を失わず
 - 十、能く一切大雨を受け、盈溢有ること無し
- 以上十徳の中、二、三、四、五、七、十等の徳がこの御和讃の上に出ているようであり、先「名号不思議の海水は 逆謗の死骸もとどまらず」という前半について申し上げましたが、それは専ら「逆謗の死骸」についてでありました。

しかるに行巻に於いては、
「願海とは、二乗雑善の中下の屍骸を宿さず、何に況んや人天の虚仮、邪偽の善業、雑毒雑心の屍骸を宿さんや。」

と説かれて、逆謗のみならず、二乗や人天の雑善までも全て屍骸となっており、
『論註』には、

「海とは、言うところは、仏の一切種智は深広にして涯無し。二乗雑善の中下の屍骸を宿さず。之を海の如しと喩ふ。」

と如来の清淨智海を釈せられてあります。「中下の屍骸」とは、中下とは縁覚声聞のこととあります。つまり二乗のこととあります。雑善とは貶斥した言葉で、二乗は智障を除くことが出来ないが故であります。そこで本願海には二乗も人天の虚仮善悪等も全て宿さないと言われるのであります。死屍とは、大悲を破り、仏性を滅すが故に死屍と云われるのでありますが、それが、誠に屍骸という自覚を持つのは、名号不思議の海水に摂取せられてのこととあります。如来の本願海は一切のものがそのままであることを許さないで、皆正定聚の菩薩たらしめることを示されるのであります。

転成

「衆悪の萬川帰しぬれば 功德のうしほに一味なり。」

この一味の徳は、海の徳の第四であります。一味となる所には「余水、本名を失ふ」の第三徳があるが故であります。行巻には海徳の一味について、

「海と云ふは、久遠より已来、凡聖所修の雑修、雑善の川水を転じ、逆謗闡提、恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実、恒沙萬徳の大宝海水と成す。之を海の如しと喩うるなり。良に知んぬ。経に説きて、煩惱の水解けて功德の水と成る 已上と言へるが如し。」

と説かれてあります。この御文に注意しますと「転ず」という文字が二つのものにかかっています。

即ち、

転凡聖所修雑修雑善川水

転逆謗闡提恒沙無明海水

と、一切の雑善と一切の悪と、善悪共に転ぜられることが示されてあります。悪だけが転ぜられるのではない。善もまた、凡夫聖者一切の善が、本仏の大慈悲の清浄心によつて転ぜられぬ限り、真実なものではないのであります。しからば転じてこれを如何にするか、これ次に、

本願大悲智慧真実恒沙萬徳の大宝海水と成す

と示される所以であります。名号は、本願大悲、智慧真実によつて成就し、恒沙無量の功徳を撰めたる大宝海そのものであります。この大宝海水に、善悪の雑毒そのものが入れば、転じて、本願大悲智慧真実の功徳大宝海と一味にかえ成されるのであります。これ即ち海と喩えられる所以のものであります。

先の海の十徳中の第三には、余水失本名とあり、第四には一味とあり、第十には、「能く一切大雨を受けて盈溢有ること無し」とありましたが、利根川も揚子江も、インダス河も、ミシシッピ河も、海に入れば本名を失うて、潮と一味となり、しかも、千万年如何に多くの水を注ぐうとも決して盈ち溢れる心配はありません。如来の本願海もまたかくの如くであります。誠に浄土真宗とは転成の宗教であります。転じられるものは凡聖の善悪の一切であります。まことに一切であります。しかして能転は如来の本願海であります。ここに最も注意すべきことは「成本願大悲智慧真実恒沙万徳大宝海水」との句の「成す」の文字であります。この「成す」の文字は本願……海水の上に載つていますから、一切の善悪を、本願大悲智慧真実恒沙万徳大宝海水と成すのであります。

しかれば何が成すかということではありますが、これまた、本願大悲智慧真実恒沙万徳大宝海水であります。詳しく言えば、本願大悲智慧真実恒沙万徳大宝海水が一切の善悪の雑毒そのままを、本願大悲智慧真実恒沙万徳大宝海水にと転じ成すのであります。ここに、生仏不二一体の第十八願の深い趣きがあるわけであります。薪が火によつて火になるのであります。本願功徳によつて、本願の功徳に転成せられる。これ即ち本願の宗教の本髄であります。これを今讚には、「衆悪の萬川歸しぬれば 功徳のうしほに一味なり」と仰せられるのであります。

一味

この転成の教旨を『唯信抄文意』には、

「自然というはしからしむといふ。『しからしむ』といふは、行者のはじめてともかくもはからはざるに、過去・今生・未来の一切の罪を善に転じかへなすといふなり。『転ず』といふは罪を消し失はずして善になすなり。よろづの水、大海に入れば即ち潮となるが如し。弥陀の願力を信ずるが故に、如来の功徳を得しむるが故に、『しからしむ』といふ。」

と説かれてあります。この御文を注意して頂きますと、「弥陀の願力を信ずるが故に、如来の功徳を得しむるが故に」とあります。川は流れて海に入ります。衆生の万川は如何にして本願の海に入るのか。それは唯、信であります。信心を成就することを避けて、何とか心をそらせて信一念の関所をぬけようとする所に、一切の異解は生れる

のであります。絶対に一度、久遠の本願真実に真向きになつて、一切の自力を打ち破つて頂かなくては、海一味の世界に入ること出来ません。信心開發せずして、悪人でも善人でもこの身このままとしようような、言葉だけ弄んでいたのでは、終にこの大乘一味の世界も、罪徳一味の語も、かえつて人を誤らせ、社会を毒する因となるであります。火の字を汚物に貼っておくのではない。汚物が火によつて火にされて浄化されるのであります。

六、惑智一味

「尽十方無礙光の 大悲大願の海水に

煩惱の衆流帰しぬれば 智慧のうしほに一味なり。」

大悲大願の海水

この和讃は、衆生の煩惱、即ち惑と、如来正覚の智慧とが、如来の本願大悲の徳によつて、一味にされることをお説き下さつたものであります。それは、大海にも喩うべき大悲本願に、衆生が帰命することによつて成就するのであります。

「尽十方無礙光の 大悲大願の海水に」

尽十方無礙光とは尽十方無礙光如来のことです。即ち如来の大悲大願の海水ということでもあります。大悲大願の海水とは、前讃の名号不思議の海水と言われた32の対して、因位の本願を示されたものであります。大悲大願とは第十八願の徳を示されたものであります。如来はその因位の本願に於いて、如何なる衆生をも救済せずにはおかない。一切衆生を全てもらさず救わねば正覚を成就しない、「若不生者不取正覚」と誓われ、やがてその本弘誓が成就した相が、尽十方無礙光如来であります。無礙光こそは、真にかかる因位の本願に酬いて成就せられたものであります。故に、光明の中にはこの本願の意を満足されてあるのであります。でありますから、本願によつて助けられるとは、光明によつて助けられることであり、光明によつて助けられるとは、本願の意を領解して助けられることでもあります。

大慈大悲

『観経』の真身観には、如来の大悲光明の大明が示されてあります。即ち彼の文に云く、

「一一光明偏照十方世界 念佛衆生攝取不捨。其光明相好及與化佛不可具説。但當憶想令心眼見。見此事者即見十方一切諸佛。以見諸佛故 名念佛三昧。作是觀者、名觀一切佛身。以觀仏身故亦見佛心。佛心者大慈悲是。以無縁慈悲攝取衆生。」

この文の大意は、如来は八万四千の一一の相好より、八万四千の光明を放ち、一一の光明よく十方微塵世界を照して、一切衆生を照育し、念仏の衆生を攝取して捨てたまわず。その光懐に攝取して金剛不壊の深信に執持せしめたまうのである。如来の光明功徳は計り知ることは出来ない。この不可思議の光は、肉眼で見えるのではなくて、

心眼即ち心のまなこ、信心の智慧によって見る。即ち信知するのである。この本仏の光明を信知するものは十方世界の諸仏を見る。諸仏即ち弥陀、弥陀即ち諸仏で、弥陀を信ずるものは恒沙の諸仏の護念証誠を得るのであります。もし弥陀に撰取されても、諸仏が顔をそむけるならば、それは真実の撰取ではない。諸仏の護念証誠は念仏の衆生に於いてのみあるのである。「諸仏を見るを以ての故に念仏三昧と名づく。」念仏三昧の境に於いて諸仏は現前するのであります。

「仏身を観ずるを以つての故に、亦、仏心を見る。仏心とは大慈悲是れなり。」これ『観経』に於ける広大なる文字であります。仏心とは大慈悲に外ならない。次に、

「無縁の慈を以て諸の衆生を撰す。」

の一句こそ、先の「光明徧照十方世界、念仏衆生撰取不捨」の句の意を説かれたものであります。「無縁の慈」とは大慈悲のことであります。慈悲に三縁の別が説かれます。いわゆる、衆生縁の慈悲、法縁の慈悲、無縁の大慈悲がそれであります。この三種は次第の如く、小慈悲、中慈悲、大慈悲と言われます。

三縁の慈悲

衆生縁の慈悲とは、衆生を縁することによっておこる慈悲と言われます。衆生の現実の苦悩を縁として起る慈悲のことです。即ち、譬えて言えば、一人の子供が重病の床に横たわって命旦夕に迫っている。これを看病する親は帯紐解かずに半狂乱になって泣いております。病む子において起る慈悲であります。やがて一朝その子が亡くなって泣き悲しむ親を見ては、会う人毎に涙して同情します。皆衆生の苦悩においておこす慈悲であります。この慈悲は衆生が衆生に於いて起すが故に、凡夫の慈悲とも言われるのであります。しかし親も朋友も病む子の枕辺にあつて如何に悲しむとも病をよくする術はありません。そこでこれを医師に見せます。医者には法に依つて病気を診断してこれを治療します。もし病原を診断してこれを全快せしめた時、これこそ真の慈悲であります。

これは一つの喩であります。法縁の慈悲というのは、法を縁じて起す慈悲であります。衆生が苦しむのは、真実の法にくらいが為であること、法を通して起す慈悲であります。素人の病人に対して起す涙が、衆生縁の慈悲の例であるならば、医師が診察を通しておこす慈悲が、法縁の慈悲の喩えであります。親は子供に注射一本させたくなくとも、医師は時にメスを振るわねばならぬ、即ち法縁の慈悲であります。この法縁の慈悲は、二乗の人のおこす慈悲と言われます。

「大師聖人即ち勢至の化身、太子（聖徳太子）また観音の垂迹なり、是の故に我二菩薩の引導に順じて如来の本願を弘るにあり、真宗これによって興じ、念仏これによりさかなり。これしかしながら聖者の教誨によって更に愚昧の今案をかまえず、彼の二大士の重願ただ一仏名を専念するにたれり。今の行者錯つて脇士につかうることなかれ、直ちに本仏を仰ぐべし」

二菩薩の引導によって本物の大慈悲を領解して生きられた聖人の念仏の教え、仰ぐべきであります。

仏は無縁の大慈悲、勢至は法縁、観音は衆生縁の慈悲とせられることを申しました。しかし、弥陀の脇士が勢至と観音であることを思いますと、弥陀の大慈悲あつての、勢至の法縁、観音の衆生縁の慈悲であります。法縁の慈悲を法縁の慈悲たらしめるものも、衆生縁の慈悲を衆生縁の慈悲たらしめるものも、それは弥陀の大慈悲であります。したがって、もし弥陀の大慈悲の領解なくして、観音の慈悲だけにとどまり、法を聞くという法縁の慈悲だけにとどまるものがあれば、それは、二菩薩の御意になわぬものであつて、勢至も勢至たること能わず、観音も観音たることが出来ないで、衆生は依然として迷いにあるでありましょう。そこで二菩薩をこえて本仏を仰げとおおせられるのであります。

聖者たちの中には、橋をかけ、道を開き、薬や食を衆生に施した方があります。尊い衆生縁の慈悲の現われであります。しかし衆生はただその時の温い心に欲の満足をするだけで、真に魂の開覚にまで行かないならば、仏道の真意を全うするものではありません。観音の札所や八十八ヶ所を巡礼して、人間の功利的な欲念を祈願するが如き、浅草の観音様が東京市民の雑多な欲願の通俗信仰の対象であるが如き、皆、真実の法を聞くことなくして、ただ抜苦与樂の慈悲にすがつて御蔭を得ようとする脇士につかえる世界であります。法を説くところの勢至の鋭い法縁の慈悲が、通俗信仰の対象とならないこともうなずかれることでもあります。一切衆生は二菩薩の引導によつて、本仏に帰せねばなりません。

「仏心とは大慈悲、是なり。無縁の慈を以て諸の衆生を摂す。」

「衆生を摂す」。摂すとは摂取不捨のことであります。この摂取不捨とは、誠に大悲の本願の意を端的に示された言葉であります。信巻信樂釈には『涅槃経』の一切衆生悉有仏性の文が引用せられてありますが、その文には、如来心、即ち仏性を、大慈、大悲、大喜、大捨と示されてあります。大慈とは、与樂、大悲とは抜苦、衆生の苦悩を抜いて永遠の大樂を与えてやりたい。これが大慈大悲であります。かかる大慈悲は、抜苦与樂の文字が示すが如く、すでにそのうちには、仏の意、即ち本願が動いているのであります。その本願の真髓こそ、第十八願、至心信樂之願であります。第十八願の世界こそ、仏の無縁の大慈悲が円満に速に実現せられた世界であります。したがって第十八願の念仏の世界において外には、大慈悲の真実なる具体的世界はないのであります。仏の本願を外にして慈悲を求めるところに、衆生の迷妄があるわけでありませぬ。本願の領解こそ、仏の大慈悲を全領した世界であります。即ち如来の本願に眞実相応したる信心の智慧の世界こそ、大慈悲の正しく受け取られた世界であります。

そこを蓮如上人は『御文章』に、

「この阿弥陀如来は深く歡びましまして、その御身より八萬四千の大きな光明を放ちて、その光明の中にその人を摂め入れておきたまうべし。さればこの意を『経』には、まさに『光明遍照十方世界 念佛衆生摂取不捨』とは説かれたりと心得べし。」

大慈悲の御喜び、即ち摂取不捨であります。先に、仏心をさして大喜大捨とあつた、大喜が即ちそれであります。仏は衆生の念仏を喜びたまいて摂取したまうのであり

ます。しかるに、その大喜と共に大捨、即ち捨てることあるは如何なる意でありましようか。

大捨とは、愛憎の心を捨てるものは、二十五有を捨てるものであります。凡夫は愛憎の心に終始しますから、捨てることが出来ないであります。人間は一本の花さえほんとうには咲かすことが出来ないで、咲いた花を愛し取ろうとするのであります。太陽は、花を咲かせはするが、しかし、花を大地に捨てて所有しようとはしませぬ。仏の大慈悲は、衆生を念仏の華と咲かせはするが、所有はなさらないのであります。捨てない所には慈悲はない。しかし捨てて所有しないままが、大慈悲の撰取の中に育てられているのであります。でありますから、捨と不捨は本願の大悲の中に両立するのであります。大捨の文字は平等の大海を意味しているようであります。この平等の大願海に一切衆生は撰取されるのであります。これ即ち第十八願の徳であります。

煩惱の衆流とは、衆生現実の機を川の流に喩えられたものであります。煩惱の一切差別の河は本願の大海に帰することによつて、平等一味のうしおになるのであります。でありますから「帰しぬれば」の文字こそは、唯一絶対の本願と、唯一絶対の機との、無限の契機を示されたものであります。帰とは帰入であり、自力の心をひるがえして本願海に回心帰入することでありあります。即ち帰するとは大信心のことでもあります。

一味という文字の「一」は、甚だ大事至極の文字であります。もしこの「一」が何であるかがわからず、この一に何等の交渉をもたないならば、自覚とか、自証とか、悟りとか、道とか、大善とか、光とか、徳とか、そうした尊いことの一切が、本質的には成就しないことでもあります。あるいは、人類は、この「一」が何であるかを尋ねているのである。劫初久遠からこれを明確にしようとして探ね求めているのだということができると思います。この一味という文字は、如来浄土の菩薩眷属が、平等一味の世界に示された文字であります。ひいて生死海に今現に念仏している行者の一味の世界、即ち同一念仏無別道故の一味の世界にも通ずるわけであります。しかるに、この一を法の上に現わされたものが即ち、いわゆる「一乗海」であります。行巻に示されたるが如く「唯是誓願一仏乗。」如来本願の世界には、二乗、三乗あることなく、ただ是れ誓願一仏乗であります。本願こそは永遠の一であります。行巻には、『華嚴経』を引いて、如何に本仏弥陀が恒沙の諸仏と現われようと「異なる如来無さず、異なる法身無さず」との義を示されてあります。

「華嚴経に言はく、文殊の法は常に爾なり。法王は唯一法なり。一切無礙人一道より生死を出でたまえり。一切諸仏の身、唯是れ一法身なり、一心一智慧なり。力無畏も亦然なり。」

これ法界は唯一法身、一法、一道、一心、一智慧なることを示されたのであります。が、その一とはただ是れ誓願一仏乗であります。この誓願一仏乗こそは、やがて真実の教行信証となつて、衆生海に回向顕現せられるのであります。そこで行巻には、教に就いて、念仏と諸善と比対論して、いわゆる四十八対を示して後、「本願一乗海を按ずるに、円融満足極速無礙絶対不二之教なり。」と教の絶対不二を示し、次に機に就

いて十一対を表わして「しかるに一乘海之機を按ずるに、金剛の信心は絶対不二之機なり、知る可し。」と結ばれました。

これを更に掂げますと、絶対不二之教、絶対不二之行、絶対不二之信、絶対不二之証となり、教行信証の絶対不二を主張せられるのでありますが、これは真実の教行信証が一乘絶対の本願名号をその体とするが故であります。今讚に「煩惱の衆流帰しぬれば 智慧のうしほに一味なり」と惑智一味を顕わされるのは、絶対不二之証を讃えられたのであります。即ち、煩惱の流れは一ならぬ雑多でありますが、この善悪虚仮の雑毒は、本願一乗の力によつて転じて、智慧のうしほに一味となるのであります。

この和讃こそは、一切衆生をして如来の智慧に一味たらしめんとする、本願の意を明かに示されたものであります。即ち一切衆生の煩惱を、如来本願の力によつて、寂滅せしめんとする大悲、寂滅平等の境に一切衆生をおかんとする願意の広大さを、示されたものであります。これまことに如来久遠の本願、第十八願の若不生者の意であります。

即ち至心信樂の大信心海に入る衆生は、因中すでに一味平等の智慧を回向せられるものでありますが、やがて、正定聚に住するが故に滅度に至るのであります。滅度とは大涅槃を証することであり、大涅槃とは、無量寿、無量光の世界、この大悲智慧光の世界に入つて、その智慧光によつて煩惱即菩提と智徳を成就するのであります。これ正しく第十一願の世界であつて、第十八願の大益を示されたものであります。

「又性と言うは是れ必然の義なり。不改の義なり。海の性の一味にして、衆流入れば必ず一味と為りて海の味、彼に随いて改まらざるが如し。乃至、安樂浄土は、諸の往生する者、不浄の色なし、不浄の心なし。畢竟じて皆、清浄平等無為法身を得ることは、安樂国土清浄の性、成就せるを以ての故なり。」

と示されてあります。これ即ち浄土は正道の大慈悲より生じたるものなるが故であります。正道の大慈悲のみが出世の善根である。その出世の善根たる正道の大慈悲より生じたる浄土である。「正道大慈悲 出世善根生」と論の文が示すが如くであります。正道の大慈悲とは

「平等の大道なり。平等の道なればなり。名づけて正道と為る所以は、平等は是れ諸法の体相なり。諸法平等なるを以ての故に発心等し。発心等しきが故に道等し、道等しきが故に大慈悲等し、大慈悲は仏道の正因なるが故に、正道大慈悲と言えり。」

と、まことに平等の大慈悲によつて成就された浄土であります。

「性と言うは、是れ必然の義、不改の義なり。」とは、必然と言うは他を絶対に己に同ぜしめることであります。梅漬けの、他の一切を紅く酸くしてしまうが如くであります。「不改の義」とは、己は絶対に他に同じないことであります。大火の中に何を入れても、火は決して薪にも炭にもならぬが如くであり、金剛石を不浄物に入れても、金剛石は断じて不浄にはならぬが如くであります。浄土の性もまた然りであつて、他の菩薩、声聞、縁覚、天、人等、如何なる悪業煩惱も皆、必ず浄土の徳に同ぜしめするが、浄土は更に変わらない、これ即ち、必然、不改の義であります。よつて、

「海の性は一味にして、衆流入れば、必ず一味と為りて（必然の義）海の味、彼に随いて改まらざるが如し（不改の義）」と。」

これまことに浄土の性功德であります。十八願の衆生は是の徳によつて成仏するのであります。今讚はこの得益を示されたのであります。円頓の徳の讚嘆を終わります。

七、畢竟成仏の道路

「安樂仏国に生ずるは 畢竟成仏の道路にて

無上の方便なりければ 諸仏浄土をすゝめけり。」

安樂仏国に生ずるといふことは何の為であるか、これ往生成仏せんが為であります。弥陀の浄土は願心莊嚴の涅槃界でありますが故に、往生するものは必ず成仏する。それ故に安樂国への往生は、畢竟成仏の道路である。成仏の為の最上無上の方便なるが故に、恒沙の諸仏は弥陀の本国へ往生することを勧めたまうのであります。これが本讚の大意であります。

畢竟成仏の道路。畢竟といふことは如何なる義でありましょうか。これに二義あります。

第一義は究極の義であります。究極とは、「この上もない」といふこと、即ち最上至極、無上といふことであります。そこで「畢竟成仏の道路」とは「最上至極の仏果を成就する道」といふことになるのであります。

『論註下』（証卷御引用）の順菩提門釈の御文、楽清浄心を説かれる処に、

『三には楽清浄心、一切衆生をして大菩提を得しむるを以ての故に、衆生を撰取して彼の国土に生ぜしむるを以ての故に』とのたまへり。『菩提』は是れ畢竟常樂の処なり。もし一切衆生をして畢竟常樂を得しめずば、即ち菩提に違しなん。この畢竟常樂は何に依りてか得る、大乘門に依るなり。『大乘門』とは、謂く、彼の安樂仏国土是れなり。是の故に又『衆生を撰取して彼の国土に生ぜしむるを以ての故に』と言えり。」

とあります。ここに使われている畢竟常樂とは、最上無上至極の常樂といふことでもあります。楽清浄心とは、(一)一切衆生をして大菩提を得しむるを以ての故に、(2)衆生を撰取して彼の国土に生ぜしむるを以ての故にと、二つの事が説かれてあります。衆生をして得しめたいのは、菩提、即ち畢竟常樂の処であります。菩提より外に畢竟常樂の処はあり得ない。しかるに、この畢竟常樂は、具体的には、如何にして何処に於いて得るのでありませうか。これ大乘門と言われるところの安樂仏国に於て得るのであります。この故に、「衆生を撰取して彼の国土に生ぜしむるを以ての故に」と仰せられるのであります。畢竟常樂を得るとは成仏することでありすが故に、この御文も亦、安樂仏国が究極成仏の道路たることを示されたものであります。

第二義は「果逐の義」即ち果し遂げることであります。

『論註下』の不虚作住持功德の釈（証卷御引用）にある説であります。云く、
 『即ち彼の仏を見たてまつれば、未証淨心の菩薩、畢竟じて平等法身を得証す。淨心の菩薩と、上地の諸の菩薩と、畢竟じて同じく寂滅平等を得るが故に』とのたまへり」と。

これ不虚作住持功德、即ち第十八願の利益を示されたものであります。この文は初地已上七地以還の未証淨心の菩薩も、八地已上の法性生身の菩薩も、遂に平等法身を成就し、果し遂げることを示されたのであります。

安樂仏国は願心莊嚴の淨土であつて、無為涅槃界であります。方便莊嚴のままが涅槃界でありますが故に、一乗海なのであります。一乗海、即ち大乘門であります。故に、唯に、未証淨心の菩薩のみならず、上は補処の弥勒菩薩より、下は悪逆の凡夫まで、凡聖逆謗全て畢竟じて等しく平等法身を得させて頂くのであります。即ち、如何なる差別の諸相といえども、平等に大信決定して彼の安樂仏国に往生するならば、菩薩の階次を一地一地と修行して昇ることなく、彼の安樂の国徳自然の妙用によつて、畢竟じて寂滅平等を得るのであります。「安樂仏国に生ずるは、畢竟成仏の道路にて」とは、この横超成仏の果を示されたものと頂けるのであります。鸞師は「五種の不思議中、仏法最も不可思議なり」と言い、「菩薩必ず一地より一地に至りて超越之理無しと云わば、未だ敢て詳ならざるなり。」と説いて、凡聖全て畢竟成仏の超証を、仏法不思議と示しておられます。淨土の徳によつてついに差別を超えて成仏するのであります。

この二義は共に頂けるようであります。「終に、最上至極の仏果を成就し遂げる」道ということであります。畢竟成仏とは、聖道淨土を問わず、仏教の根本眼目であります。一乗の法と言ひ、円頓一乗と言ふも、皆これであります。しかるに、今、弥陀仏国を「畢竟成仏の道路」と示されたことは、淨土の教行信証こそは、円頓一乗の法たることを示されたものであります。聖道の行学に行き詰まったものは、淨土に帰すべきであります。掲げられた群生の大理想は、自力策励によつて成就するのでなく、淨土に帰することによつて超証するのであります。「道路」とは大道の意であります。自力の小路によらずして他力の大道によるべきであります。